



Title	ベンガル中産階級の自己形成（抄）
Author(s)	カムルッディン, アフモド; 三木, 雄一郎
Citation	印度民俗研究. 1991, 7, p. 1-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50337
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベンガル中産階級の自己形成（抄）

カムルッディン・アフモド著

三木雄一郎 訳・注

ベンガル中産階級の自己形成（抄）

カムルッディン・アフモド

（幼年時代）

私がこの世に生を受けたのは今世紀の10年代、第一次世界大戦の前夜だった。その日は西暦1913年9月8日月曜日、ベンガル暦(註1)では1320年バドロ月(註2)23日にあたり、厚い雲が垂れこめていた。母に聞いた話ではその夜は一晚中雨が降りしきり、氾濫した川と湿地帯の水路に溢れる水が両側から押し寄せてきて、私を連れ去っていきそうな勢いだったという。四方はただ満々たる水である。だが私が産声を上げた時には、すでに東の空に暁の光が差していた。私が生まれ落ちたのは世界が重苦しい興奮に包まれているさ中のことだった。

わずか数日前に英国王ジョージ5世の戴冠式が終わったばかりだったが、その余韻はまだ人々の胸から消えていなかった。当時ヨーロッパでは、様々の勢力が他に対抗しようとして盛んに同盟を結んでいた。小アジアに至る道がドイツには必要であるとヒトラーが述べたように、当時のドイツでは誰もがこう口を揃えていた。我々にはベルリンからバグダッドまでの権益が認められるべきである、ドイツはこれ以上不利な立場には甘んじられない、と。帝国主義イギリスはイギリス海峡の彼方から平和と友好のメッセージを送り続けていたが、まさにその時アイルランドのロンドンデリーの街では大虐殺が行われていたのである。世界にはすさまじい嵐を呼ぶ暗雲が立ちこめていた。しかし、ほとんどすべての国の指導者たちが、相手国を滅ぼす腹を固めていたその時に、一方ではルーブル美術館から紛失した「モナリザ」(註3)の絵が、幾多の努力によって再び姿を現すことが可能となったのである。誠にわれわれ人間は驚くべき生き物である。第一次大戦の前夜、ヨーロッパに敵意と報復をめぐる陰謀の渦巻く中で、人間の心に美のシンボルを守ろうとする抑えがたい情熱が生まれたのだから。科学の分野であれ政治の世界であれ、今世紀の10年代に人間は不可能を可能にし、未知なるものを既知とし、あるいは自然を制御しようと懸命に努力した。飛行機が発明されたのは1903年だったけれども、それが実用に移されるのは10年代に入ってからだった。マルコーニによる無線通信機の実用もまた10年代のことである。要するに、現代文明の土台が築かれたのが今世紀の10年代だった。

アジアの大国も科学の波に洗われ始めた。ミルやベンサムの思想がインテリ層に刺激を与えていた。1912年に孫文博士の指導の下に、中国で共和制が宣言された。ベンガル州を分割しようとする、時のインド総督カーズン卿の計画(註4)は、ベンガルの中産階級の運動によって、その一部が放棄された。1905年時点でのベンガル州は、1911年のベンガル州とは異なっていた。ビハールとオリッサが切り取られて別個の州が構成された。そしてスリホット県を除く残りのベンガル語地域には、ムスリムを多数とする東ベンガル・アッサム州が新設された。このイギリスの新しい政策はイギリス

政府、ヒンドゥー、ムスリムの三者すべての顔を立てるものだった。ベンガル州の分割をムスリムは歓迎した、なぜならそれによって彼らが多数を占める州が誕生したのだから。またヒンドゥーの指導者たちは、分割の線引きがわずかしき西方にずらされなかったことをもって自らの勝利を宣言した。その一方では、ムスリムは自分たちが欺かれたと思い、ヒンドゥーは首都(註5)がカルカッタからデリーに移されたことによってベンガル人が軽視されたと思った。イギリスはイギリスで、アッサムの白人茶園主たちにとっては何ら喜ばしい事態が生じなかったと考えた。ベンガル分割令が撤回されたにせよ、ムスリムがより多くの恩恵を受けたにせよ、つまるところイギリス支配の統治上の必要から旧ベンガルを縮小するもくろみが成功したのだという点までは、当時誰も掘り下げて考えようとはしなかった。詩聖タゴール(註6)の詩にこうある。

道言へり 吾神なり と
車言へり 吾こそは と
偶像思へり 吾神なり と
誠の神は 笑ひ給へり

このことは、ベンガル分割令の撤回から25年の歳月を経て明らかになる。ベンガルのヒンドゥー中産階級は、政治的実権を獲得する望みを絶たれてしまうのだ。すなわち1937年にA. K. ファズルル・ハック(註7)を首班として、ムスリム連盟などの連立政権(註8)が発足したのである。その結果インド独立を目前に控えた1946年には、ヒンドゥー中産階級は他ならぬ自分たちの運動によって生まれた統一ベンガルを二分割して、もとのベンガルから離れていってしまった。それに対してムスリム中産階級はベンガルの統一を保つために、できる限りの努力を払ったのである。

ともあれヒンドゥー中産階級の指導層は、1911年には勝利に酔いしれていた。そしてその同じ年に勝利の喜びをいやが上にも増す出来事があった。半世紀にもわたって不敗を誇る白人のフットボールチームであるカルカッタ・チームを、モホンバガン・チームがカルカッタの競技場で敗ったのである。その時のゴシュト・パール選手の写真は、スレーンドラナート・バネルジー(註9)の手許に保管されていた。そしてカルカッタの競技場で歴史は後に、パキスタン建国前夜のモホメダン・スポーツ・チームの勝利の遠征によって、まさしく再現されるのである。ベンガル分割令反対運動を展望して情熱的な文学者や詩人が登場したように、パキスタン運動が開始される直前の時期にも、やはりそのような人々が現れた。中でも詩人フォロルク・アフモドの作品や、同じく詩人ゴラム・モストファの「ビッシュノビ」は特筆に値しよう。

イギリス政府がインド帝国の首都を1912年にカルカッタからデリーへ移転したために生じた悲しみは、ベンガル語地域をもって一州が設立されたことによって、ほとんど掻き消されてしまった。さらに翌1913年にはラビンドラナート・タゴールがノーベル文学賞を受賞して、全世界にベンガル

の名を高めた。ベンガル語は世界の舞台で光栄ある地位を獲得したのである。アジアの人々にとって、受賞はこの上ない誇りとなった。

私が生まれたのは、ダッカ県ピクロモプル郡のショルゴル村だった。ラジャ・ケダル・ラエ(§10)がムガル皇帝アクバルの將軍マーンシング(§11)に敗北を喫したのが、この村だと伝えられている。この地方でラージャー・マーンシングに加勢した者には、後にもれなくムガル朝から恩賞が下った。私の先祖のボロ・カーンはタルク・ボロ・カーン(§12)という免税地を与えられた。しかし、それはアクバル帝の御代のことではなかった。わが家が免税地の恩典に浴したのは、ジャハーンギール帝の印璽の押された証書によってだった。

ショルゴルは非常に活気に満ちた村だった。朝から晩まで、バサールのすべての店で取引がなされていた。他の村と違って、週に一日だけの市は立たなかった。ヒンドゥーとムスリムの両者は、1930年以前には友愛によって結ばれていた。カースト・ヒンドゥーは優れて教育が高かった。だがムスリムは、村の上層を形成する独立したタルクダル(地主)(§13)だった。そのためヒンドゥーはいくら教育や財力のある者でも、ムスリムのタルクダルやジョミダル(§14)に地税を払わなければならなかった。もっとも、大タルクダルや大ジョミダルはいなかったけれども。カルカッタ高等裁判所の最初のインド人判事サー・チョンドロマドブ・ゴーシュは私たちの村の出身だった。彼の家ではアッシン月(§15)の祭礼がいつも盛大に祝われていた。彼の家はわが家の小作だったけれども、祭礼には私たちもその家を訪れたものである。私たちの座は最前列に設けられる慣いだった。

私たちが幼い頃、村にはショロト・ゴーシュという著名な弁護士がいた。人々は彼のことをシャヘブ(旦那)・ショロトと呼んでいた。その訳は当時すでに彼が食事の際ホークとスプーンを用い、木製の足の上に水を張った琺瑯の器を乗せて、ちょうど今でいう洗面器のようにして顔や手を洗っていたからである。もちろん彼は一度も渡英したことはなかった。しかし彼にとってイギリスは文明の聖地だった。だからこそ、後に下の息子のケトロバル・ダーシュ・ゴーシュがオックスフォードへ入った時には、大喜びしたのだろう。ケトロバル・ダーシュ・ゴーシュは服装、立居振舞、言葉、仕事のすべてにシャヘブ振りがすっかり身について帰国したけれども、精神的にはインド民族主義者だった。学生としては、むしろ彼の兄のラカル・ダーシュ・ゴーシュの方がはるかに優秀だった。何しろいかなる試験であれ決して二番に落ちたことがなく、カルカッタ大学の英文学修士の試験にファースト・ディヴィジョンの首席で合格して、金賞を授けられたほどの人なのだから。だが、この人の所作や話振りなどはまさしく哲学者のようだった。言うなれば、世俗のことにひどく疎かったのだ。英文学の外に存在する広大な世界にはまったく関心がなかった。以下は、私が母から聞いた話である。修士試験の結果を知らせる電報を郵便屋がもってくると、ラカル・バブ自ら受取りに出たそう。郵便屋は心付けを貰わないと電報は渡せないと言った。ラカル・バブは

何としよう。奥へ退って母親に相談すると、こう言われた。「ラカル、きつといい知らせよ。半ルビー貨と一ルビー貨をもってお行き。もし半ルビーで不足を言うようなら、一ルビーやるといいわ。」彼は戻って郵便屋に告げた。「母さんに半ルビー貨と一ルビー貨を貰ったから、どちらでも望みの方をお取り。」と。だが郵便屋の返事はこうだった。「旦那、両方とも頂戴したいですな。」ラカル・バブは困ってしまい、また奥へ退って母親の意見を求めた。母親は「両方ともおやり。2枚とも見せるなんて馬鹿だねえ。」と言ってから、こう続けた。「電報をもって、旦那衆のところにご挨拶しておいで。」私の家に回ってきて知らせを受けると、私の母はこう訊いた。「ラカルや、お祝いのお菓子はどうしたんだい。」と。「そうだったよ、小母さん。」言うなり彼はバザールの菓子屋へ走り、ジレピ菓子(註16)を10セルも籠に詰めこんで帰ってきた。おかげで旦那衆は皆音を上げた。もうお菓子は食べられないよ、と。

後年彼はカレッジの先生になった。しかし、それ以上の出世はしなかった。悪童どもを押さえることができなかったのだ。そのため彼の授業の時は、大抵いつも校長先生がじきじきに教室の秩序を保っていた。彼は服装にはまったく無頓着だった。彼を見て一体誰がシャヘブ・ショロト・ゴーシュの息子だとか、シャヘブ・K. D. ゴーシュの兄だと思っただろうか。

私の村でもう一つ特徴的だったのは、今世紀に入って間もなく、ビクロモブルのムスリム中産階級がカースト・ヒンドゥーに対抗するために英語を勉強し始めたことである。ムッラー(註17)やモウルヴィー(註18)による英語排斥運動はなぜかあまり効を奏さなかった。村には二つの高校があった。ビクロモブル郡全体では、パキスタン建国以前に45の英語学校があった。スリノゴル・タナ(註19)は私たちの村から数マイルの距離だったが、そのこのジョミダルはヒンドゥーだった。そのため祭礼になると、スリノゴルの賑わいは大変なものだった。とりわけチョイトロ・ション克蘭ティ(註20)とボイシャキ・メラ(註21)に始まり、アシャル月(註22)のロトジャトラ(註23)、アッシン月のドゥルゴトショブ(註24)と続く熱狂はカルティク・ブジャ(註25)まで冷めなかった。ロトジャトラには、砂糖でこしらえた山車や神像などが用意された。そして、砂糖や黒砂糖で作った各種のバタシャ菓子(註26)やいろいろな品種の米でこしらえた焼米、種々のバナナ。またボイシャキ・メラでは、土製・木製の様々の人形や他のおもちゃが売られていた。もちろん、それらのおもちゃはどれも、日本製のプラスチックのおもちゃのように美しくはなかった。しかし、それらが幼い子供たちにもたらした喜びは、最近の子供が外国製のおもちゃを手にしても決して味わえないものだった。当節の高価な人形を買ってもらえるのは、特別な階層の子弟に限られている。従って、みんなの顔が等しくほころぶのは、もはや見られなくなってしまった。

私の父方の祖父であるモイヌッディン・アフモドは42才でこの世を去ったが、その時祖母は31才だった。私の父は18才だった。祖母は西暦1895年に、6人の子供を抱えて寡婦になったのである。祖母にはオスマン・

アリ・ブンイヤという名の兄がいた。彼はダッカ県のムスリムで最初の法廷弁護士だった。彼はB. L. (法学士)の試験に合格して、ブリーダーつまり弁護士になったのである。彼の弁護、抗弁、法廷書類などの巧みさについて、私はずっと後の弁護士時代に老弁護士たちから聞かされた。彼は金には不自由していなかった。というのは、何度か再婚して持参金の分け前に与かったからである。だが不幸の分け前には一切与からなかった。酒と女達の歌舞には二つながら目がなかった。祖母に聞いた話では、この人が私の家を訪れる時にはいつも大きな御座船を借りて乗ってきて、夜はその中で寝泊まりしたそうである。なぜならそこには、ありとあらゆる彼のお楽しみと趣味の道具が揃っていたからだ。一方私の祖父の兄弟には、今は亡きニジャムッディン・シャヘブがいたが、この人はフォルドブル(註27)のドウドゥ・ミヤン(註28)の弟子だった。ニジャムッディンは厳格なムスリムでイスラームの習慣と儀礼を重んじていた。当時彼は採用試験に受かりながら公職に就くことを考えず、ファラーイジー運動(註29)に身を投じたのである。オスマン・ブンイヤは内心彼を恐れていた。それでお楽しみは船でこっそり行ったのである。私の父があまり勉強しなかった原因の一つには、この祖母の兄にあたる弁護士への感化が挙げられる。

祖母は宗教上の節制を厳しく守る人だった。決められた通りに礼拝や断食を行い、毎朝コーランを朗読した。手にはいつも数珠を巻いていた。

私の母が「長男の嫁」として嫁いできたその日から、祖母は母に鍵束を渡した。祖母は以後決して家刀自として振る舞うことがなかった。宗教上の務めを果たすことに専念していた。ほとんどもものも喋らなかった。私たちに対してさえそうだった。1936年に私たちの父が亡くなった時も、祖母はまだ生きていた。享年54才で(註30)父はこの世を去った。おかげで私たちは遺産の分配に与かれなくなってしまった。父が死んで一週間後に、今度は祖母が亡くなったからである。そのため祖母は私たちの取り分を書き遺すことができなかったのだ。

幼い頃の思い出は今では多くが霧に包まれたように霞んでしまった。ただ断片的に浮かんでくるばかりである。1914年に第一次世界大戦が勃発した時には、私はまだ赤ん坊だった。1919年に家庭内の空気が陰悪になったのは幼な心に覚えている。父と母が不和になり、そのために母が何度も涙を流したからである。祖母は母を慰めた。私は何も分からなかった。後に知ったところによると、母が実家の母親から譲渡された財産を、父の承諾なしに一人きりの弟に証書を作って与えてしまったのが、ことの起こりだった。祖母の尽力によって、1922年に父と母の間に一応の和解が成立した。事柄は抜き差しならないものではなく、むしろ多分に誇りと面子に関わっていた。母方の祖母の実家は、私たちの村から5マイル離れたアトバラ村にあった。また母方の祖父の家は、当時小舟で二日かかるアオナ村にあった。まだわが国にランチが走っていなかった時代の話である。さて母方の祖母は、夫の死後もっぱらアトバラで暮らすようになった。というのは一人娘の彼女が、家

屋敷及び田畑の唯一の相続者になったからである。おそらく母方の祖母はこう考えたに違いない。私の母がアオナの実家へ帰るのは難しいだろう。また、その弟がアトバラの家や財産を管理するのは不可能だろう、と。それで、アオナにある夫の財産はすべて母の弟が受け取り、アトバラにある自分の財産を母が受け取ることを考えついたのである。ところが困ったことに、その弟は母と母方の祖母の両方にひどく腹を立て、カルカッタへ飛び出してしまった。そして、そこで職を見つけて家へ帰らなくなってしまったのだ。どうやら母親に勘当されたと思いこんだらしい。そこでこの問題を解決するために母は、母親から譲り受けた財産を弟に贈与する証書を作成したのである。この件に関して初め母は、父の承諾を得る必要があるとは考えなかった。それによって父の誇りが傷つくかも知れない、あるいは妻に対する威信を損なわれたと感じるかもしれない、とは思ひも寄らなかったのだろう。私の母方の祖母は1921年にこの世を去った。従って母の苦しみが消されるのを見届けることはできなかった。彼女は大変な心痛のなかで晩年を送った。自分の不注意によって母を苦しめることになってしまった、とよくこぼしていた。母方の祖母の死後、家や財産がどのように処分されたのか私たちは知らない。なぜなら母も、また私たちの誰も、アトバラへはもう行かなくなったからである。家付きの駕籠舁もいれば、雨季用の大船もあったのだけれども。アオナは私たちの家からずいぶん遠かった。アリアル湿地ばかりかイチャモティ川も越えなければならなかった。船旅は強盗に襲われたり、嵐や洪水に見舞われる恐れが強かった。そのためアオナへ行くのは、まさに命がけだった。

私が幼い頃、村ではまだあまりマッチが使われていなかった。ジュートの滑らかな茎を干し、その先端に溶かした硫黄を塗って部屋においておく。そして、それを木炭の火にかざして明かりにするのである。金持ちの家でようやくハリケーンランプ(§31)が使われ始めたばかりだった。普通の家ではヒマシ油やカラシナ油のランプ、または石油ランプが用いられていた。外出の際にはカンテラが使用された。村の良家の子供たちは金曜日の礼拝やイード(§32)、婚礼、あるいは他の礼拝の日には、アチカン(§33)とパジャマ(§34)、それに宝石で飾った帽子を身につけていた。イギリス靴と呼ばれるオックスフォード・シューズも普及し始めたばかりだった。イドゥル・アズハ(§35)、婚礼、ファテハ(§36)などの折には去勢牛を屠り、親類や小作人、それに貧しい人たちに食事が振舞われた。招待客と親類は陶器や琺瑯の皿で、一般の人たちはバナナの葉で食事を摂った。ヒンドゥーの隣人たちのために、ヨーグルトや菓子も用意された。イードやショベボラト(§37)などの祭礼の日には母や叔母たちは、シェモイ(細麵)にありとあらゆる種類の米粉のパン、種々のハルヤ菓子(§38)、ココナッツ団子、碾き米のハルヤ菓子、ボロフィ菓子(§39)などを拵えた。村の多くの子供たち、とりわけムスリムの子供たちは小学校やモクトブ(寺子屋)に通っていた。だが金持ちや良家の子弟は一定期間家で学習を積んだ後、英語学校へ入学していた。村のムスリムはルンギ(腰巻)とクルタ(シャツ)を着ていた。シャツのことを私たちの

地方では「パンジャビ」と呼んでいた。どうしてパンジャビという名がついたのか、今もって私には分からない。後に他ならぬパンジャブ人たちから、どうしてそう呼ぶのか尋ねられたものである。もっとも、ずっと後の1959年に私が大使としてミャンマーに赴任中、同国を訪問した当時のソ連首相フルシチョフがこれとよく似たシャツを着ているので、不思議に思って訊いてみたことがある。ウクライナではそれはごく普通のシャツである、とのことだった。だがウクライナとベンガルが、果たしていつの時代にいかなる交渉を持ったのか私は知らない。ムスリムの旦那衆は白い腰巻に白い長シャツ、白糸の刺繍の入った帽子、それに草履を身につけていた。木製のサンダルを履くのは、礼拝の前にオジュ（垢離）(註40)を取る時だけだった。ダッカの町で流行した船型の帽子はダッカだけのもので、私たちの村では見かけなかった。白い服を着用することは当時、身分の高いものの徴のように考えられていた。

村のヒンドゥーは皆、ドゥティ（腰布）をまとっていた。だが裕福な人々は腰布とシャツの他に、襷の入ったチャドル（スカーフ）を肩にかけていた。もちろんムスリムも、冬になれば防寒用に木綿やウールのスカーフを身につけた。毎夕ヒンドゥーの居住区では鐘青銅の鐘が鳴り、香が焚かれ、燈明があげられていた。時にはキルトン（賛歌）が歌われたが、ちょうどそれはムスリムの家庭で催されるミラド（祝いの集い）(註41)に似ていた。夕刻になるとヒンドゥーの良家の女性たちが朗詠や歌、楽器の演奏を始めるのである。当時はまだカルカッタとの結びつきがそれほど十分でなかったので、人々は日刊誌の代わりに週刊誌や月刊誌を購読していた。

ヒンドゥーの女性たちはダッカ産サリー、シャンティプル(註42)産サリー、それにジャムダニ（花柄織）(註43)サリーこそ着用したけれども、絹のサリーはあまり身につけなかった。婚礼の際にベナレス産サリーを用いる程度だった。当時普段着といえば、生地薄い外国製の服がまず挙げられた。普通の家の女性たちは、手織機で織ったより安価な服を着ていた。おしゃれな男性たちも大抵、シャンティプル産腰布や襷の入ったつや出し木綿(註44)のパンジャビを身につけていた。こうした服装はムスリム男性の場合、あまりお目にかからなかった。このような服装をする人は花柄入りのエナメル革のパンプスを履いていた。ヒンドゥーの女性は通常靴を履かなかった。だが男性といえども、それらは他所行き用の服装だった。役所勤めの者を除いて、そのような服装をしている者はいなかった。

アッシン月には通常、町の事務所や裁判所、学校やカレッジが休みになった。従って、この時期になると、勤め人はヒンドゥーもムスリムもみんな村へ帰省した。他の地域はいざ知らず、ピクロモブルの農村ではどこもそうだった。村ではこの月に大層楽しい祭りが催された。私たちの村では、雨季になると船が唯一の交通手段だった。そのためほとんどの家が、自家用のガート（船着き場）に小舟を繋いでいた。雨季が終わると、それらの小舟は池に沈められるのである。ヒンドゥーの旦那衆は盛大にドゥルガ・プジャ(註45)を

催した。私たちも子供の頃、よく神像を見物に行ったものだ。神像を川に流す日には、大抵小舟による競争が行われた。競争用の船は縦長で幅が狭かった。両の舷は赤、黄、青、緑、白などとりどりに彩られ花などが描かれていた。中には虎や豹の描かれている船もあった。舳先や艦には孔雀が描かれていた。また時には、人魚が描かれていることもあった。ビジョヤ・ドショミ(註46)がすむと熱狂も冷めるが、それでもドショラ(註47)の菓子や、ロッキブジャ(註48)の団子がヒンドゥーの家から私たちのところへ贈られてきた。この他にもチョイトロ月の末頃になると、ヒンドゥーの小作人たちがマンガーを漬物にして届けてくれた。

一般の村人は白銅や真鍮で作った皿やコップを用いていた。それは恐らくいざという時に、流して換金するためだったろうと思われる。陶器の皿やガラスコップを使うのはムスリムの良家に限られていた。

当時は大学を卒業したでディプティー・マジストレート（行政・司法次官）になったものだ。それほど勉強に身を入れなかった者でも、少なくともサブ・レジストラ（副登記官）にはなれた。公務員の給与水準は低かったが、村の人たちは彼らを尊敬の目で眺めていた。その訳は公務員になると、退職後も給料の半額の恩給がついたためらしい。貨幣価値が今日よりはるかに高かったので、公務員の暮らし向きは概してよかった。往々にして上役に気に入られたり、 kongress の義勇奉仕員に侮辱されるような手合いは、たいてい学問がなくても高い官職に就いたものである。こんな出鱈目なディプティー・マジストレートもいたそう。さる県のマジストレート（行政・司法長官）が、ある人物をサブ・ディプティー（行政・司法次官補佐）に採用したいのだが、とムスリムのコート・ナーシル(註49)のもとへ寄せた。その人物はまだ若かった。さて数日後コート・ナーシルは、その若者の知識では次官補佐の職務は無理でしょう、と白人の行政・司法長官に報告した。ところが長官の返事はこうだった。「では次官の試験をしてみたまえ。」つまり次官補佐の仕事ができぬとあらば、次官で採れないかというのである。コート・ナーシルはもうそれ以上異を唱えなかった。これとは別に、誰にも解読不能な署名をする行政・司法次官のことも知っている。署名の字面が駕籠の形を思わせたので、「パルキ・マジストレート（駕籠次官）」で通っていた。ある日彼は私とお喋りしている時、自分は今までまっすぐに字を書けた例しがないと語った。だんだん尻上がりになってしまうのだ、と。一度白人の上司にこう言われたそうである。「セム語族は右から左へ書き、アーリヤ人は左から右へ書き、日本人は上から下へ書くそうだが、モウルヴィー殿、あなたは下から上へだ。」と。

村のムスリムの良家は皆、小作地から上がる収入のみに頼って暮らしていた。他人には辛く当たらなかった。小作人たちのことを考えていたのである。中にはお楽しみで牛や山羊の角力とか鶏や鳩の喧嘩をさせる人もいたが、それらは特にボウシュ月(註50)やマーグ月(註51)に盛んだった。村の普通の子供たちはハドゥドゥ（カバディー）、ダリヤバング（ロープ遊び）、水泳、

風揚げなどをして遊んだ。また魚取りをする者もいた。だが学校へ通う子供たちはフットボールに興じた。ヒンドゥーの居住区にあるクラブやレスリング道場、さらには杖術、ナイフ、棒術などの体育施設は、村では今世紀の20年代に大いに流行したものである。

ムスリムの良家の客間には、大抵ムンシー（書記）を一人置いていた。書記たちのほとんどはノアカリ県の出身だった。彼らは幼い子供たちに初等教育を施し、ベンガル文字の手ほどきをした。彼らの主な仕事は、日々のアジャン（礼拝の呼びかけ）(§52)をシイマモティ（導師職）(§53)を務めること、それにミラド（祝いの集い）やジャナジャ（葬式）の執行、コトム（コーラン全編）の読誦などだった。その他西方のピール（聖者）(§54)たちが村を訪れて人々に教えを説き、手相を見、護符を与えなどした。彼らはお礼に現金や雌鶏、家鴨、ギー、卵などを受け取り、ムリダン（弟子たち）の家でピラフやジョルダ（黄飯）(§55)を振舞われた。

私たちの村では雨季に入るとほとんどの農民は仕事がなくなり、ヒンドゥーの金貸しから借金して家族を養っていた。利息は複利だったので、いったん借りた金は決して返済されなかった。村の普通の人々の朝食は炒めた米、団子、チラ(§56)、ヨーグルト、煎った米などだった。農作業をする時には、農民たちは水漬けにした残り物の米を田圃で食べた。村の人たちは対症療法だの同種療法、ハキーム(§57)の薬などは信用していなかった。アーユルヴェーダの流れを汲むコピラジ（医師）に絶大なる信頼を寄せていた。

父と母が一向に和解しないので、私は学校へ上がるのが遅れてしまった。祖母は私を、ダッカにいる父方の叔父のところへ預けることに決めた。ダッカは私の家から15マイル離れていた。その三男坊の叔父は、その頃ダッカ・インターミディエイト（予科）・カレッジの職員をしていた。彼はビクロモブルのムスリムで最初にカレッジを出た人物だった。祖母はわが家の家庭環境からできるだけ私を遠ざけるべきだ、と考えたのである。私の母は伝統的な家刀自型の女性だった。彼女は炊事を初めとする家事万端の統括、子供たち、姑、小姑、義弟妹などからなる大家族の賄いを、できるだけ一手に担おうとした。反対に父はひたすら楽しみを追った。どうやら父という人は女性にたいして、小説の主人公が女主人公に求めるようなことを望んだらしい。だが母にそのような才能はなかった。そのため財産の問題以外にも、わが家にはどこか風穴のようなものが空いていた。私たちもそれを感じてはいたのだが、当時はその原因を探りかねていた。

幼い頃、恐ろしいまでに天気荒れた夜のことは今でも思い出す。それは1919年のアッシン月のことだった。わが家の男手は叔父と使用人のシャモチュの二人きりだった。(§58)私たちはこの使用人を、敬意を込めてシャマと呼んでいた。その日は午後からすさまじい風が吹き荒れていた。夕方近く、次第に雨が強まってきた。私たち四人の幼い子供を抱えた母と祖母は扉や窓を閉めきった。しかし雨はさらに勢いを増し、辺りは木の折れる音やブリキ板の飛ばされるガタガタいう音で包まれた。隣の家は、礼拝の呼びかけ

のようなゴンゴンという唸り声を立てていた。祖母と母は隣の家へ避難しようとした。というのは、そこには男手が多かったからである。ハリケーンランプを手にした母が扉を開けたとたん、猛烈な突風が見舞いランプが消えた。周りはいっぺんに闇に包まれた。とうに夜になっていたが、空は赤く見えた。稲妻のきらめきだけが道を行く頼りだった。シャマが私の二人の弟を膝に抱え、母が妹を抱いた。私は叔父の後についていった。ところがその時、頭の上からマンゴーの大枝が降りかかってきた。幸い頭には当たらずにすんだ。私は必死の思いで右足を掻き出し、隣の家へたどりついた。足に大怪我をして、ひどい出血だった。この事故のため、私は右足が少しびっこを引くようになった。取り乱した母の叫び声を聞きつけて、誰かが私を抱き上げ、子供たちの寝かされている小部屋へ運んでくれた。何と恐ろしい夜。一夜明けると雨は小降りになった。外へ出てみると、中庭はすっかり水浸しだった。倉の米は水漬けにした飯のようになっていた。それを軽く炊いて食べられるように支度が始まった。周囲は底知れぬまでの水また水だった。たくさんの死体が浮いていた。その中で、赤い絹のサリーを着て金の装身具を身につけた若いきれいな女の死体が目を引いた。額の髪の分け目に塗ったシンドゥル（朱）の色もまだ褪せていなかった。両の手首にはめた貝殻製のチュリ（腕輪）が、金属のプレスレットにカチャカチャと擦れていた。警察署に届けたが、その後どうなったかは知らない。

私たちの村が天然痘に襲われたのは同じ年のチョイトロ月のことだった。父方の叔母たちは残らず実家へ帰るなり、夫のもとに身を寄せるなりしていた。母一人が避難しなかった。なぜなら年老いた姑の世話が あったし、母としては一度は父が家を見舞いに帰るのではないかと思っていたようである。数日間、私は激しい高熱に苦しめられた。二、三日顔や手足に発疹が生じた後、それが全身に広がった。数日間は死と向かい合わせだった。バナナの葉にバターを塗り、その上に寝かされた。草の葉に浸したミルクを体に振りかけられた。およそ一月死と闘いながら徐々に快方に向かった。しかし顔が崩れて醜くなったので、私は長らく鏡を見ようとはしなかった。

雨季が終わるとどこからか一艘ずつ船がやってきて、私たちの遊び場の近くの水路にもやった。やがてたくさんの船が集まり、一斉に竹棹を立てて繋がれた。それはまるで葉を落とした竹藪のようだった。夜の闇のなかで竹棹がキラキラと水に影を落とす様子は、船の明かりにも増して美しく見えた。これらバディヤ(ᱪᱟᱴᱟᱝ)と呼ばれる人々が、ベデあるいはジブシーだったのかどうかは分からない。船が彼らの住み処だった。女の子相手にはガラスのチュリ、少年たちにはおもちゃや鸚鵡、マイナー鳥の子などを売っていた。私たちは猿回しや蛇使いを見物しに集まった。蛇を捕まえる呪文を教えてほしいと、ずいぶんねだったものだ。もちろん何の御利益もなかったが。アッシン月の末頃になって水嵩が減ると、彼らは船を解いていずこへともなく旅立っていくのだった。1945年、第二次大戦中にイギリス政府は彼らの船をことごとく破壊した。そのため以後は、このような船団は見かけなくなってし

まった。

1920年に私のダッカ行きの話が持ち上がったが、健康状態がひどく優れないので、その年は母は私をダッカへ出そうとしなかった。そのため勉強を始めるのが一年遅れた。翌年私はダッカへ出て、前に述べた三男坊の叔父の家に下宿した。当時、田舎のわが家からダッカへ行くには雨季ならば船を用いた。船は水路や湿地、川を越えて一晩中走った。夜が更けるにつれて静寂も増した。ただジャブジャブという櫓の音と、船頭の操る舵の軋む音が聞こえるばかりだった。だが私を落ち着かなくさせたのは、船乗りたちのパティヤリ（船漕ぎ唄）だった。彼らはシャリ（川唄）やムルシディ（ムルシダバード節）（註60）も歌った。まったくぞっとするような体験だった。今なら高速のランチが走っていてほんの数時間で到着するところだが、小船に何時間も揺られるのはさながら地獄の道行きだった。しかしガタガタと絶え間なく耳をつんざくようなエンジン音とひしめくほどの乗客によって、船旅の楽しさが失われたのも事実である。古き良き時代のことを、ワーズワースはこう詠っている。

というのは、茫然と、また思いに沈んで

臥しどに身をよこたえるとき

彼等は、孤独のよろこびである

内心の眼にひらめくのだ。（註61）

〔前川俊一訳〕

私はダッカに着くと、まず一年間は叔父の家で勉強する必要があると言われた。そうしなければ入学試験に受からないだろう、と。叔父の家はデワン・バサールにあった。一般の人々がアルメニヤトラ（註62）・スクール（アルメニヤ街学校）と呼んでいた、教員養成カレッジのデモンストレーション・スクールへの進学を目指すことになった。後に学校はラボラトリー・スクールに改称された。カレッジの校長はウエスト博士、副校長はビス先生、教頭はT. G. コリンズ先生だった。学校の授業はすべて英語で行われていた。1922年の一月の第一週に、私は入学試験を受けた。生まれて初めての試験だった。結果は上から三番目の成績だった。記憶している限りでは、その時ムスリムの少年で合格したのは私を含めて二人だけだった。残りはアングロ・インディアン、ヒンドゥー、グルカ（ネパール人）、それにネイティヴ（インド人）クリスチャンなどで占められていた。学校の制服はカーキ色の半ズボンに半袖シャツ、下がカーキ色の靴下と黒のブーツだった。一台の長机を二人で使わされた。ただ級長だけは別で、一人用の机が与えられた。

当時ダッカには公立の学校が三つあった。ムスリム・ハイスクールとカレッジイト・スクール、それに私たちの学校である。ムスリム・ハイスクールに通う生徒はほとんどがムスリムだった。そして全員がモフシン奨学金を給付されていた。授業はウルドゥー語でなされた。カレッジイト・スクールで学ぶ生徒のほとんどはヒンドゥーで、授業はベンガル語だった。私たちの学校の授業は英語で行われた。公立以外ではミッション系の学校がいくつかあって、その授業もやはり英語だった。

ダッカは小さな地方都市だった。路面にはほとんど、レンガによる舗装など施されていなかった。雨季を除いて、街はいつも埃にけぶっていた。春と夏の午後には、貯水槽からパイプで水が引かれて大通りに撒かれていた。ダッカのナワーブ(註63)やミュニシパリティ・コミッショナー(市会の委員たち)の通る場所は特に怠りなく。白人の高官たちは皆、ロモナの新市街に住んでいた。ロモナの新市街は、ダッカに東ベンガル・アッサム州の首都が置かれていた1906年から1911年の間に建設された。ファズルル・ハックは、当時ダッカの行政・司法次官兼アコモデーション・オフィサー(接受官)だった。

ナワーブのトムトム(馬車)がいかなる小路を通ろうとも、そこには牛車やビシュティ(水汲み人)を使って必ず水が撒かれた。水汲み人たちは、ムスリムの飲料用を初めとする家庭用水を運ぶのが主な仕事だった。皮袋一杯分(壺に約4杯)の水が4パイサーだった。

ダッカのパコルカニ(ギー付きパン、バラーンター)、シク・カバブ、ルティ(パン)などは名物だった。パコルカニの大きな切れをチーズとギーで炒め煮にしたものが2アンナだった。パコルカニだけなら4パイサーだった。パコルカニ切れと2アンナのシク・カバブで朝食になった。米1マウンドが3ルピー半だった。街の人たちはパラム米(註64)を食べていた。アウシュ米(秋作米)やボロ米(春作米)は口にしなかった。高収獲品種のイリ米はまだ開発されていなかった。薪1マウンドが8アンナ、すなわち50パイサーだった。中産階級向きの住宅の家賃が10から15ルピーだった。牛肉が2アンナ、去勢山羊の肉が4アンナについた。魚、雌鶏、卵、野菜、香辛料などは実に安く手に入った。もっとも、ダッカのミルクはいただけなかった。ミルク屋は平気でミルクに水を混ぜた。貝殻を貨幣として使うことは既に禁じられていたけれども、2パイサー、1パイサー、半パイサー、3分の1パイサーとして貝殻も代用されていた。特に穀物商ではそうだった。穀物商で4パイサーの品を買うと、おまけがついたものである。魚市場でも同様だった。マンゴーを一つと言って買うと二つくれた。マンゴーは二つで一つに勘定されたのである。

旦那衆の中には外出用の自家用トムトムを持っている人もいた。一般の人々の足は乗合のパルキ・ガリ(駕籠型馬車)(註65)だった。ムスリム中産階級の間では、ボルダ(註66)の制が堅く守られていた。馬車の簾窓すら開けようとしなかった。婦人たちの中にはボルカ(ヴェール)を被るだけでは気がすまず、馬車の乗り降りや家の出入りの際、蚊帳で隠すものまでいた。

ダッカの諺にこういうのがある。「カジャ、クッティ、シャンカの三つが寄ればダッカになる。」まさにこの諺の通りだった。上流のムスリム市民は一般にクッティと呼ばれ、彼らはその言葉遣いと同じく、その精神もまた優雅で才気に富んでいた。彼らは学問は全然しなかったが、知恵と勇気は兼ね備えていた。パキスタン建国後はスラム住民に圧迫され、また次第に他県から人口が流入するようになって、彼らは勢力を失った。アユーブ・カーン(註

67) とモネム・カーン(§68) の政権によって迫害と非難に晒されたシッディク・バザールのモティ・ショルダルの死をもって、彼らの時代は終わりを告げたように思われる。

ダッカのムスリム社会はチョーク・バザールからイスランプルまでの街区と、チョーク・バザールからラルバグ城(§69) までの街区とに分かれていた。一方の街の結婚式の案内状が、もう一方の街に届けられることはなかった。「アシュラフ(金貨)」と呼ばれる上流階級と「アトラフ(周辺)」と呼ばれる庶民の区別がやかましかったからである。今日では、そのような区別はすっかりなくなっている。

ナワーブ家のカジャー族こそはダッカのムスリムの指導者だった。それは知恵や学問によるものではなく、イギリス政府の優遇によるものだった。カジャー族は広大な土地を領有していたが、ダッカの上流市民のためにいかなる教育機関を設けようとしなかった。その真の狙いは、以下のような次第で明かるみに出た。1921年から22年にかけて文学士で法学士のアブル・フシェンが、カジャ・アフシャンウッラに対して、あなたの父君のナワーブ・アブドゥル・ゴニ氏の手紙を新聞に公表しますよ、と書き送ったのである。問題の手紙はナワーブのゴニ・チョウドゥリが、ベンガル州議会にワクフ法(§70) に関する法案を提出しようとしてアブル・フシェンに協力を求めたのがきっかけで、フシェンの手に入ったものだった。依頼を受けたフシェンがナワーブ領のワクフ地の領有に関する書類を調査していると、ナワーブが息子に宛てた手紙が見つかった。それには次のようなことが書かれていた。私としてはダッカのクッチィたちをナワーブ家の家臣とは考えていないが、それでも彼らを家臣のように扱ってやらねばなるまい。一族が指導者として君臨するためには、それが必要だ。連中が教育を受けて本当のことを知るようになれば、指導者としての我々の夢は破れてしまうに違いない。だからほかのことになら金を使って適当に援助してやるのも結構だが、学校だけは建てるべきでない、と。この手紙が公表されるとナワーブ家はアブル・フシェンと敵対し、彼を破滅に追いやろうとまでした。ただし地方出身の学生たちに対しては、ずいぶんと援助するようになったが。

地方からは商人や知識階級が出てきた。ダッカに定住するようになったカースト・ヒンドゥーの多くは、学校やカレッジに入学した。ラージャー・ラーム・モーハン・ローイ(§71) の時代から、ヒンドゥーたちは英語を熱心に学んできた。そのため、官公庁の高職は彼らに独占されていた。市港の業務も当時はヒンドゥーが扱っていた。ナワーブ領の管理も彼らに任されていた。ナワーブ家がヒンドゥーの弁護士や博士に依存していたので、ナワーブ家の子弟は彼らの家によく出入りした。ダッカの一般のムスリムの教育は誰も担おうとしなかった。彼らはナワーブ家のもくろみ通りに扱われていたのである。

地方出身の相当数のムスリムもダッカに家を構えた。その大部分が村の地主層だった。都会に家を構えるのは社会的な地位を向上させるためだった。

彼らのうち知識階級はごくわずかで、商人は皆無だった。ほとんどの者が村との関係を保ち続けていた。彼らの多くは村にはない娯楽や、村では不正義であり反社会的であると見なされていることを存分に楽しむために、都会に家を構えていた。従って彼らもダッカの上流ムスリム市民と同じく、教育に対して無関心だった。もっともカースト・ヒンドゥーについても同様のことが言える。なぜなら彼らもまたヒンドゥー上流市民やシャンカリ（貝殻職人）、タンティ（職工）のためにいかなる教育機関も設けなかったからである。ムスリムのクッティ（上流市民）や貝殻職人、職工などと同様、カジャー族もまた自らの教育にあまり力を注がなかった。学問に身を入れたのは、むしろ一族に養子として迎えられた人の子供たちだった。一族の子弟のうちで、ムスリム・ハイスクールの課程を修了してカレッジに進学する者はほとんどいなかった。今世紀の半ばまでは高等教育を受けた人など皆無に近かった。それでも概して彼らは、ウルドゥー語や英語をそこそこには使いこなしていたけれども。ナワブ家は娘婿にジョミダリ（地主の権利）の分け前を主張されないように、格別の注意を払っていた。そのためナワブ家の婿には、凡庸でしかも無名に近い青年ばかりが選ばれた。その結果カジャ・ナジムッディン(§72)とカジャ・シャハブッディン(§73)は、普通にはショホル・バヌ（奥様）の息子さんとして知られていた。同様にショイヨド・アブドゥル・ハフィズとショイヨド・アブドゥシュ・シュリムは、街の人にアミナ・ビビ（奥方）の子供さんで通っていたのである。

ヒンドゥー・ブルジョアジーは当然のことながら、徐々に街での勢力を広げつつあった。なぜならクッティたちは依然として旧市街に住み、シャンカリ（貝殻職人）たちはシャンカリ・ポティ（街）に住み、カジャー族はアフシャシ・モンジル(§74)の塀の中から出ようとしなかったからである。ヨーロッパと同様にこの国においてもまた、商工業者たちの努力によって都市、港湾、そして強力な中央政府が築かれつつあった。

私はカジャー族の多くの人をその子供時代から知っているが、彼らはナラヨンゴンジ(§75) どころか、チョーク・バザールを抜けてラルバグ城へすら来なかった。英語教育を受けたアフシャシ・モンジルの人たちがダッカの外へ出るようになるには、今世紀の10年代にカジャ・ナジムッディンがダッカ・ミュニシパリティ（市会）の議長職を辞して、カルカットで政治活動に入るのを待たなければならなかった。

クッティたちは争いごとがあっても、裁判所に訴訟は持ちこまなかった。ダッカ市は22のボンチャヨト(§76)に分かれていて、ことはそこで決せられた。ボンチャヨトの裁きに不服があれば、ナワブに直訴した。彼ら街のムスリム上流市民は職人頭、馬車屋、肉屋などを営んでいた。後に彼らは茶やショルボト（果汁水）の店をたたんで、衣料品店や靴屋を開業し始めた。彼らのうちまず名前を挙げるべき人物は、ミルジャ・アブドゥル・カデル・ショルダルだろう。彼は若い頃、カジャ・イスマイルに召し抱えられた。そしてコカイン中毒の主人から大金をせしめた。飛ぶ鳥を落とすほどの勢いだっ

た。ちょうど私が学生の時分にショルダル・シャヘブはダイヤモンド劇場を買収し、照明と踊り子を上手に使ってしばらく劇場をはやらせた。やがて映画の時代が到来すると、今度は映画館を開業した。ライオン・シネマはダッカの昔からの映画館だが、テッパッノ・バザールのバヤッノ・ゴリ（通り）は映画見物にきたムスリム庶民でいつも賑わっていた。

当時のベンガルの県ではどこもマラリアやカラアザールが猛威を奮っていた。しかしダッカでは、これらの熱病はほとんど流行しなかった。ダッカの蚊のすさまじさは有名だったけれども、ハマダラ蚊はいなかったのだ。ダッカの蚊に刺されるとフィラリアに罹ると人々は思っていた。それはきっとダッカでこの病気が大流行していたせいだろう。

1911年にベンガル分割令が撤回されたことで、サリムッラ(註77)は内心大きな打撃を受けた。なぜなら第一にダッカはもはや州都でなくなり、第二にヒンドゥーに対しても敗北を喫したからである。イギリス政府は彼にG. C. S. I. (註78)やG. C. I. E. (註79)という英統治下でもっとも栄誉ある称号を授けた。そしてさらに、ダッカに大学を創設することを約した。サー・サリムッラは1915年に死去した。ダッカ大学が創設されたのは1921年のことだった。

ダッカ大学の第一回卒業式に、たいへん楽しい祭典が催された。私も叔父と一緒に祭典を見学に行った。まず幕が上がったとたん、壇上に掲げられた大きなインド地図が目をつけた。片側に教授が一人、そして向かい側には学生が一人立っていた。教授は地図を見つめて言った。「弟子よ、汝の国インドの地図が正面に掛かっている。」それから二人がどんなやりとりを交わしたのか、今では覚えていない。やがてどういう仕掛けか地図の中央部が開き、この世ならぬ美しい乙女の顔が現れた。と同時に、母なるインドを称える「豊かに河流れ、木々たわわに実り、青々と稔り豊かなる」(註80)の合唱が始まった。その後スライドが上映された。もちろん無声で幻灯機が使用された。マハーバータのさわりを扱ったスライドだった。ビーマとドゥリヨーダナ(註81)が棍棒で戦う場面だけは今でも印象に残っている。ドゥリヨーダナを倒したビーマは大木を引っこ抜いて、カウラヴァ軍に襲いかかっていた。スライドが終わると、「デボラデビ」(註82)という演劇が始まった。初めの方を少し見ただけだが実によかった。だが、いつの間にか眠りこけてしまっていた。

地方出身のムスリム中産階級のボドロロク（紳士）たちはマフト・トリ、ベチャラム・デウリ、ベゴム・バザール、シャトロオジャ、デワン・バザールといった地域に住んでいた。もちろん、その他、アウラド・フシェン・レイン（小路）、ジンダバハル・レインなどに居を構える一家もあった。

町の実権は次第にヒンドゥー・ブルジョアジーの手に移りはじめた。ヒンドゥーとムスリムの間に誤解が生じつつあった。ヒンドゥーの旦那衆はムスリムを嫌悪はしないまでも、確かに見下してはいた。私の交際していたヒンドゥー家庭の人たちも、菓子を奨めるとき、皿に乗せようとしなかった。ポ

イと手から落とすようにして与えられた。接触による穢れを避けたかったのである。この問題についてニーロード・チョウドゥリー(§83)は、英文の自伝の中でアル・ビールニー(§84)の言葉を次のように引用している。

「アル・ビールニーの書に曰く『ヒンドゥーたちはインド以外に国はなく、自分たちの人種も学問も比類なきものと信じこんでいる。彼らは傲慢かつ愚かしいまでに空疎で、無神経な自惚れ屋である。彼らは生まれつき他者と交渉をもつのに消極的で、彼らの内部ですら他カーストの者との交渉を避けるために最大限の努力を払っている。いわんや外国人に対しては尚更である。』と。さらにまた曰く『彼らの間に神学上の論争はほとんどない。たとえば言葉では争っても、宗教上の論争のために、魂や肉体あるいは財産を賭そうとは決してしない。しかるに彼らのあらゆる狂信は自分たち以外のもの、すなわちすべての外国人に向けられるのである。彼らは外国人のことをムレッチャーつまり穢れた者と呼び、それとの接触を堅く禁じているのである。』と。」

他の宗教を奉じる人々に対して彼らがこうした態度を取ろうとしたために、ダッカでは1926年から毎年、ヒンドゥーとムスリムの間に暴動が発生した。だが、その背景には経済的な理由が潜んでいたように思われる。これらすべての暴動の特徴は、ムスリム下層階級の人々とヒンドゥー中産階級の子弟たちが加わっている点だった。ヒンドゥー下層階級で暴動に加わったのは、わずかにシャンカリ(貝殻職人)のみだった。それは次のような理由によるものだろう。ヒンドゥー中産階級の若者たちは、今世紀の初頭にベンガル分割令の撤回を求めてテロリストの運動方向に傾倒した。彼らは地域でレスリングの道場やクラブを組織した。そしてナイフや杖、剣、ピストル、連発ピストルなどの扱い方を学んだ。彼らはベンガル分割令撤回後の宗派間の暴動に際して、その時学んだことを活用した訳である。もっともこれらのテロリストたちが、内部でも内ゲバに狂奔していた事実は忘れるべきでない。オヌシロン(§85)、ジュガントル、スリショング、ベンガル・ボランティヤズなどの抗争は日常茶飯事だった。

ニーロード・チョウドゥリーは自伝にこう書いている。

「我々が幼い頃、すなわちスワデーシー運動が我々のムスリムに対する態度にまだ影響を及ぼしていない頃、我々の態度には伝統的に形成された四つの顕著な側面が見て取れた。まず第一に我々は、かつてムスリムがヒンドゥーを支配していたという過去の歴史に根ざす敵意を抱いていた。第二に意識の面では、同時代の社会の構成要素としてのムスリムに対して全く無関心だった。第三に我々は、自分と同じ経済的ないし社会的階層に属する個人的接触のあるムスリムに対しては、友情を抱いていた。そして第四にムスリム農民に対しては、ヒンドゥーの低カーストの小作人と同様、言い換えれば家畜に対するのと同様の気遣いと軽蔑の入り交じった感情を抱いていた。これら四種類の感情のうちで、第一のものだけはたいそう明確で知性的にしっかりと植えつけられていたが、残りは単なる慣習に過ぎず、さして根の深いもので

はなかった。

ムスリムに対してこのような感情を抱くのは、我々にとってこの上なく自然なことだった。なぜなら我々は読み書きができるようになる前からすでに、ムスリムがかつて支配者として我々に圧政を布いたこと、片手にコーラン片手に剣をもって彼らの宗教をインドに広めたこと、ムスリム支配によって我々の女性たちが奪い去られ、寺院が破壊され聖地が穢されたことなどを聞かされたからである。成長するにつれて我々は、ムスリムに抗して戦ったラージプート、マラータ、シクの物語やアウラングゼーブの不寛容と圧政などについて書物を通じて知るようになる。19世紀のベンガリー文学においては、ムスリムは常に侮蔑的なヤヴァナ（異邦人）の名の下に扱われていた。バンキム・チャンドラ・チャタルジー(註86)やラメーシュ・チャンドラ・ダット(註87)の歴史小説はムスリム支配に抵抗するヒンドゥーの栄光を称え、対照的にムスリムには弱い光しか当てなかった。チャタルジーは断固たる、そして激烈な反ムスリム主義者だった。我々はこうした小説の熱心な読者であり、進んでその精神を吸収した・・・いわゆる二民族論なるものは、ジンナーやムスリム連盟の登場する遙か以前に形作られたのである。実際それは理論などではなく、歴史的事実だったのだ。前世紀と今世紀の境目の頃には、すでに誰もがそれを知っていた。我々のような子供ですら、スワデーシー運動の始まる以前に知っていたのである。」と。

ダッカでは二つの祭りの行列が有名だった。一つはジョンマシュトミ(註88)、もう一つはモホロム(註89)である。ジョンマシュトミの行列では象の背に据え付けた台座に、ヒンドゥーの指導者たちが勢揃いした。銀製の巨大な台座やたくさんのおもちゃ、そして手に手に小旗を持った数十万の行列が目当てで、地方からも大勢の見物客が集まった。ナワーブプル・ロードのレンガ造りの家の屋根という屋根は、女たちでびっしり埋まった。

モホロムの行列では飾り付けられたタジャ(註90)、ドゥルドル馬(註91)、そして色とりどりの無数の旗が人目を引いた。「哀れハサンよ、哀れフサインよ。」の聲が響き、タジャの上を千のジャラーリーヤ鳩が舞う。しかしモホロムの行列はジョンマシュトミの行列と違って、ヒンドゥー、ムスリム、男女の別を問わず、すべての人に親しまれている訳ではなかった。モホロムでは初めに杖と剣の舞が演じられ、その後炬火を掲げて行列が練り歩く。当時ダッカのムスリムはシーア派一色ではなかったのだが、それでもこの行列を見ようと相当な数のムスリムが集まった。ムスリムは行列を繰り出して勢力を誇示しようとはしていたが、宗教的な情熱となると、さほどでもなかった。実のところは、ヒンドゥーのジョンマシュトミの行列に対抗しようとしていたのだろう。

ヒンドゥー居住区では毎年演劇が演じられた。ムスリムの子供でそれに出演するものはほとんどいなかった。ムスリム・ハイスクールはホッケー、私たちの学校はクリケット、そしていくつかの学校はフットボールを得意としていた。ダッカの一般市民は風揚げが大好きだった。ダッカ最後のナワーブ

、カジャ・ハビブッラ(§92)は風揚げに大金をつぎ込んだ。数本のリールに百の風を糸で繋ぎ、シュリボンチョミ(§93)の日に屋根へ上る。彼のその日の食事は屋根に運ばれるだけではすまず、スプーンで口まで運ばれた。また鳩の喧嘩にも、ダッカの人々は大いに熱を上げた。

(学校生活)

1922年を迎えた。ムッソリーニは国際政治に一つの新しい潮流をもたらした。彼こそはファシズムの創始者だった。第一次世界大戦後、ロシアで共産主義による独裁が成立した。ファシズムは共産主義的独裁に対する反撃だった。わが国では第一次大戦後、イギリスのトルコへの扱いをめぐるキラファト運動が展開された。モオラーナー・ムハンマド・アリー(§94)とガンディーの間に協定が結ばれて、1920年に非協力抵抗・キラファト運動が開始された。多くの人々は、この運動によってヒンドゥーとムスリムの統一が実現するだろうと期待していたが、そうはならなかった。1922年にチャウリ・チャウラの警察署を kongress の義勇奉仕員が焼き討ちして、警官21名が焼き殺された。ガンディーは即座に運動を中止した。いまだ独立は達成されず、カリフのアブデュルメジト二世も廃位させられた。それでも運動は中止させられた。ジャワーハルルール・ネヘルーは自伝でこう述べている。ガンディー翁は少なからぬ場合に、理性では理解できないことを少なからず行った。なぜなら翁の信念は内なる呼び声、すなわち「直感」に基づいていたからである、と。だがインドにおけるガンディーの初めての大衆運動の実験としては、運動は成功だったと私には評価できる。インドの大衆運動における一般民衆の反応はいかなるものか、あるいはいかなるものでありうるかという点について、彼はあらまし理解したのである。大戦終了後、イギリスの政治的な要求によってトルコの分割が始まっていた。しかし、ケマル・アタテュルクは「病める」トルコを救うために、トルコの近代化と世俗国家への改造を決意した。アタテュルクは宗教上の職務としてのカリフ制は容認していた。ところが、インド・ムスリムの二人の指導者マハーバーニャ・アーガー・カーン(§95)とサイイド・アミール・アリー(§96)がアタテュルクにカリフの名誉を完全を守るように要請した結果、カリフ制は廃止されてしまった。ケマル・パシャは、二人がイギリス政府の意を受けて手紙(§97)を送ったものと解釈したのである。

この1922年に私の学校生活が始まった。入学の日にちょっとした悶着が起こった。書類にKAMRUDDINと記名したのがきっかけだった。コリンズ教頭はモウルヴィー(イスラム学者)を呼んで、その綴りがアラビア語に照らして正しいかどうかを尋ねた。というのは、ムスリムが子供たちにつけるアラビア語由来の名前には格別の意味が込められていることを、コリンズ先生はインドへ来て最初に学んだからである。アラビア語の先生に訊けばローマナイズされた正しい綴りが分かるだろう、とも思ったのだろう。モウルヴィーは書類を一瞥するなり、綴りは間違っている、Quamruddinと書くべきだ、と

厳かに言い放った。教頭先生はただ名前を書き換えさせるために、私にもう一枚書類を差し出した。私は断わった。私の理屈はこうだった。ベンガル文字のKの字は男性の頭文字ならK、女性の頭文字ならQと書くべきである。なぜなら英語でもKingは王、Queenは女王ではないか。それに英語にはKとQの発音上の区別がない。なのに、アラビア文字のクェーフにQの字が宛てられるからといって、Qをクェーフのように発音すれば誤りになるではないか、と。モウルヴィーは真っ赤な顔になった。私をベヤドブ（無礼者）と思ったのである。校長夫人で学校では保健を担当しているウエスト女史が居合わせたが、どうやら彼女は私の言うことに一理あると認めたらしかった。にっこり微笑んで私の意見に賛成した。コリンズ教頭も「もし君がそうしたければ、名前をKで書き始めてよろしい。」と言ってくれた。過去半世紀にわたって私は自分の名前にKを用いてきたが、ムスリム学者にはいつもQに直された。だが私としてはKを頭文字に使うのは、世間の決まりに対する最初の反抗のつもりだった。アブル・ハシム氏(註98)も自伝のなかで私の名前を書く際、初め二箇所はQだったが、後の七箇所はKに改めている。

ビモルという少年が最初の日に級長に選ばれた。彼は美しい外見から窺える通り、てきぱきとして聡明だった。勉強もととてもよくできた。私たちの学級には21人の生徒がいた。校長のウエスト博士の著した「ニュー・メソッド・リーダー」が英語の教科書だった。このシリーズは、三年級から八年級までの英語を母語としない生徒の学習用に編まれたものだった。下級クラスでは、まず各レッスンを吹きこんだレコードを蓄音機で聞かされた後、教授された。私たちは校長先生よりも、むしろコリンズ教頭をととても怖がっていた。恐らくそれは先生が巡回する際、手に小さな鞭を持っていたからだろう。校長も教頭もロモナの大学キャンパス内に住んでいた。コリンズ先生は通勤に自転車、そしてウエスト博士夫妻はサイドカー付きのオートバイを使っていた。当時はまだ自家用車など、ほとんどなかった。途中小さな生徒が一人で通学しているのを見かけると、ウエスト夫人はサイドカーに乗せてくれた。私は三年級の時に、幾度も乗せてもらう幸運に恵まれた。ウエスト夫人は私たちに衛生学を講じるだけでなく、実際に私たちが清潔にしているかどうかにも厳しく目を配った。上着の銅ボタンが磨かれているか、ブーツに黒の靴墨が塗られているか。このようなことをすべて、彼女の目は見逃さなかった。

図画の担当はショロト先生だった。ある日、私は図画の練習帳を忘れてしまった。ショロト先生は私が嘘をついていると思ったらしい。先生は私を懲らしめようとして、鍵束からコルク抜きを取り出した。そして螺旋状に尖った先を、私の掌に突き立てんばかりに押し当てた。私は恐ろしくなって叫び声をあげた。ショロト先生にとって運が悪いことに、ちょうどその時、校長夫妻のオートバイが階段下に停まった。ウエスト夫人は悲鳴を聞きつけるや教室へ駆けこみ、私を二階に連れ出した。私はロゼンジ（甘味入り錠剤）を与えられて泣き止んだ。もちろんこの話には続きがある。ショロト先生は長

らく私に口を利いてくれなかった。口を利くようになってからも、私が練習帳を持っているいないにかかわらず、私の絵を見ようとはしなかった。その結果当然のことながら、私は少しも絵が上手にならなかった。

学校ではショロショッティ・ブジャ(§99) がたいそう盛大に祝われた。図画と教練の先生が、飾り付けの指導と祭りのお目付役に当たった。またファテハ・ドヤジュドム(§100)にはミラド(祝いの集い)が開かれた。だがムスリムの生徒はとても少なく、モウルヴィーが総動員をかけても一部屋が埋まらないほどだった。ミラドには私たちは、カジャ・ナジムッディンの弟のカジャ・シャハブッディン(§73) が招かれた。彼はまだ政治に携わっていなかった。彼はモウルヴィーだった。体はガリガリに痩せ、顎先が細く尖っていた。尻尾付きの押しのきいたパジャマ(§34) に、髷の入った長めのクルタ(シャツ)を身に着けていた。素晴らしく甘美な喉だった。コーランと天蓋は生徒たちが捧げ持った。他のモウルヴィーを招いてミラドを祝う時は御礼は5ルピーの相場だったが、彼に限ってコリンズ教頭は10ルピーを弾んでいた。それは恐らくコリンズ教頭も他のイギリス人官吏と同じく、アフシャーン・モンジルの人々に対して過剰なまでの敬意を払っていたからに違いない。

私たちは小さい頃から英語を熱心に勉強してきた。学校の先生と保護者の両方から、「ステーツマン」や「イングリッシュマン」を読むことを勧められた。私たちは読もうと努力はしてみたが、ほとんど理解できなかった。当時ムスリムの少年は少なくともダッカの場合、ベンガル語を母語として学ぶことはなかった。カジャー族はウルドゥー語を話していた。ダッカに住むクッティやシャンカリたちは、ウルドゥー語とベンガル語を混ぜこぜにしたような言葉を母語として使っていた。一方ダッカのヒンドゥー・ブルジョアジーは、東ベンガルのベンガル語を話していた。半封建的なムスリム・ブルジョアジーは、カジャー族と交際したり召使いたちを統率するため、そして何よりも自分たちがベンガルの外に基盤を置くムスリムであることを証明するために、ウルドゥー語を学習した。指導者たちがウルドゥー語を使ったので、それに従う人々も当然、それ以外の言葉を自分たちの言葉とは考えられなかったのだ。ちょうど私たちはウルドゥー語が母語であるという偽りの主張をせんがために、ベンガル語を継母扱いしようとする母語を失った民族のようだった。

私たちの学校の生徒は四つの「ハウス」のいずれかに所属した。各ハウスには組長が一人いた。私たちに規則を守らせるのがプリーフェクト(組長、監督生)の役目だった。私はコリンズ・ハウスの所属だったが、ウエスト・ハウスのビモルとビス・ハウスのマドブが好敵手だった。と言ってもスポーツではなく、クラスの席次をめぐる話である。私たちの学校はD. P. I. (§101)の管轄外で、学校運営の全責任を校長が負っていた。年次試験の結果は12月の第二週に発表された。教頭先生がメリット(賞点)に達したものの名を読み上げ、私たちは一級上のクラスに進んでいった。私たちの間に試験の結果をめぐる揉め事はなかった。

ところがある時、面白い事件が起こった。私たちの学校では全科目合格しないと進級が認められず、二科目落第すると退校になる規定だった。だがその年、試験結果が発表になると、ある少年が二科目落第にもかかわらず進級していたのだ。生徒たちはぶつぶつ言い出した。私たちの気持ちを察したコリンズ先生が、生徒を整列させて短い話をしてくれた。問題の生徒はナワープ家の子弟なので、特別の計らいがなされたのだと分かった。先生は説いた。この生徒は家柄によって名を成すだろうが、君たちの成功はあくまで教育と知識と知恵とに掛かっている。それを肝に銘じておきなさい、と。それで私たちは、この件で学校の権威を疑うようなことはなかった。後に先生の予言は真実であることが実証された。なぜなら私は学校では優等生だったにもかかわらず、パキスタンの副高等弁務官としてカルクッタへ赴任するのが、彼よりおよそ四年も後れたからである。彼は生涯、入学試験というものに受かることがなかったのだけれども。

私が三年級の時のことである。ある日の夕方校庭にいと、コロティヤのジョミタルのチャン・ミヤンがダッカ中央刑務所へ送られるという知らせが舞い込んだ。私たちは大勢で駆け付けた。チャン・ミヤンは牛車に立って人々に応えていた。私たちはそのすぐ近くまで行って、警官に制せられた。私たちも皆と声を合わせて、ガーンディー・ジー万歳、モウラーナー・ムハンマド・アリー万歳、チャン・ミヤン・シャヘブ万歳などとスローガンを叫んだ。ガーンディーとアリー兄弟(註102)がダッカを訪れたのも、同じ年のことだった。彼らは象の背中に揺られながら、目抜き通りを練り歩いた。山のような巨体のアリー兄弟に隠れて、ガーンディーの姿は私たちの目には入らなかった。私は家には内緒で見に行った。というのは、父がキラーファート運動に反対だったからである。もっとも母はまた別の意見を持っていたけれども。

ニーロード・チョウドゥリーは、こう自伝で述べている。

「逆に私はほんの小孩に過ぎなかったけれども、明確に反トルコだった。それは『スワデーシー運動』によって呼び起こされた反ムスリム感情のせいばかりではなかった。むしろ汎イスラム主義をインド民族主義への最大の脅威と認識し、それによって生じる反感を子供なりに正当化していたのである。汎イスラム主義に対する私の不信は直接には叔父のアヌクルの影響だったが、元をたどれば著名な民族主義思想家ビピン・チャンドラ・パール(註103)に行きつく。彼はその脅威について常々警告を発していたのである。」

運動が kongress の手で途中止めさせられると、運動の成果を見届けようと沈黙を守っていた革命家たちが再び登場してきた。まず資金が必要だった。そこで革命家バリンドロ・ゴシュは三人の同志と共に、1923年カルクッタ、シャンカリ街の郵便局長を殺害した。しかし逃げおおせず、終身禁固刑を受けた。

1924年ベンガル地方は旱魃に見舞われ、稲をはじめとする穀物が壊滅的な被害を蒙った。すでにカルティク月(註104)に入る前から水路や湿地帯、池などがことごとく干上がり始めた。わが家の屋敷内の池以外に、近所には

どこにも飲み水がなかった。その時私は休暇で帰省していた。小作人たちが、池から壺に一杯だけ水を汲ませてほしいと縋りついてきた。私は後先を考えなかった。小作人の家の女や子供たちを池の東岸のマングロー園に入れて、水を汲んでもいいと言ってやった。「チョト・ロケラ（小身者たち）」が屋敷内の池への立入りを許されないことなど、全く念頭になかった。話を聞きつけた遠縁の大叔父が、水を汲んだ者たちを捕まえて連れてきた。そして、誰の許可を得て屋敷内の池を使ったのかと問い質した。「僕が許しました。」と私が答えた。大叔父はその無礼が我慢ならず、私の頬を平手打ちにした。怒りと悔しさで我を失い、私もその場で再度言い放った。「お前さんたち、水を汲んでいくがいい。俺だって、池の持ち主なんだ。」その時、母と祖母が騒ぎに気づいて駆け付けてこなければ、とんでもないことになったかもしれない。母と祖母が現れるなり、大叔父は家の中へ引っ込んだ。だが全員が水を汲み終えるまで、ずっと私はその場で見張っていた。小作人たちに池の水を使わせると、どうして地主の体面が傷つくのか、今もって私には理解できない。たとえ教育を受けた小作人でも靴を履いたままでは私の家に来れないのは、子供の頃からよく見知っていた。小作人の嫁や娘は駕籠に乗るのを許されなかった。代々の家僕たる人々には何の自由もなかったのである。もちろん私たちが大きくなるにつれ、こうした虐待や無慈悲な行為は影を潜めた。後年カルカッタでの副高等弁務官時代に私はメグナド・シャハ博士に、あなたはなぜ kongress でなく Hindoo・マハーサーバーに加わったのですか、と訊いたことがある。政治的な理由を論じた後に、博士は自身の打ち明け話をしてくれた。わが国のジョミダールであるポリヤディのカーン・バハドゥル・カジェムッディン・シッディキのところへ村に学校を開く相談に行った際に、彼はひどい侮辱を受けたのだそうである。それ以来、Hindoo に対してムスリムが憎しみと敵意を抱いていることを片時も忘れられないのだ、と。私は博士に問いかけた。「ある人物のある特異な行動のせいで、御自分の政治的な立場までお決めになっていいもののでしょうか。」そして、こんな話をした。ペゴム・ロケヤ・シャカワト・ホシェンも学校への寄付を依頼しにポリヤディへ出向きましたが、やはりシッディキの態度に失望して、月刊「ショオガト」に「徒勞に終わった三日間」という記事を書いています。相手が Hindoo だろうとムスリムだろうと、当時ジョミダールの態度に変わりはありませんでした。パヨラボンドのジョミダールの娘であるロケヤ・シャカワト・ホシェンにして、そんな目に遭うくらいなのですから、と。

1924年にファズルル・ハックが州の大臣になった直後のことである。ケダラム・ボッダルがカルカッタの高等裁判所に、ハックの破産宣告を求める訴えを起こした。破産宣告を受ける前に彼は教育相を辞めてしまった。しかしこの事件があって後、ハックは一躍ムスリム大衆の指導者になった。Hindooの陰謀の手から彼を守るために、ムスリムの学生たちが村々をカンパ活動に回った。ハックは一般の農民にもよく知られていた。「デーシュボンドゥ（国の友）」ことチット・ランジャン・ダース(註105)が亡くなったの

は、事件から間もなくのことだった。1925年のことである。ファズルル・ハックを破産の危機から救ったのが他ならぬ「デーシュボンドウ」だと分かったのは、ずっと後になってからだった。

1926年、大学とカレッジの教師、インテリたちが集まってダッカに文学会が結成された。その中心メンバーは経済学教授のアブル・フシェン（修士・文学修士）、ベンガル語教授のカジ・アブドゥル・ワドゥドをはじめとする優れた文学者や思想家たちだった。彼らは迷妄に満ちたムスリム社会について、何物にも囚われずに思考し、かつ論じることを可能ならしめようとしたのである。それは知の解放運動（Movement for Freedom of Intellect）と呼ばれた。ところが、この運動に加わっている人々がイスラームから逸脱しているという訴えが、ナワーブのもとに持ちこまれた。神や預言者の教えを理性によって把握しようとする見解をこの人々が広めている、というのがその訴因だった。運動の指導者たちは、アフシャン・モンジルに召喚されて辱めを受けた。カジ・アブドゥル・ワドゥドの弟子でその女婿でもあるシャムシュル・フダ(註106)の筆禍事件が起きたのはその数日後だった。

後に30年代になって私はアブル・フシェンと懇意になり、様々の議論を経て知の解放運動の理想に惹かれた。1937年にM. N. ローイ(註107)と出会う以前は、アブル・フシェンの掲げる理想にも共鳴していたのだ。

1925年にカルカッタのモホロムの行列をならず者どもが襲い、ヒンドゥーとムスリムの間に暴動が発生した。1926年にはダッカでもヒンドゥー・ムスリム両派による暴動が起こったが、その原因が何なのか私には分からない。ただ、その時ムスリム側の中心として、カジャ・ナジムッディンの従弟にあたるカーン・バハドゥル・ショイヨド・アブドゥル・ハフィズが動いたことは知っている。後年ベンガル州議会議員になった人物である。暴動の際特に私の注意を引いたのは、ムスリムが略奪に走り、ヒンドゥーが殺傷に向かうという点だった。

ニーロード・チョウドゥリーはこう自伝で述べている。

「私のように歴史的な事件をかいぐってきた人間には、愛と憎しみを抜きにして歴史は語れないし、ありえないことが分かりはじめる。」と。

ヒンドゥーとムスリムの間に誰が宗派主義の毒を撒き散らしたかは、それほど重要なことではない。問題はそれがなぜ撒き散らされたかにある。イギリスのディヴァイド・アンド・ルール政策の結果だという人もいれば、州の主要閣僚会議が保身のために仕組んだのだという人もいるだろう。しかしそれならばファルフシヤル(註108)の時代に、ホーリー祭の色粉の掛け合いがもとでアフマダーバードやカーンプルで何日も暴動が続いたのはなぜだろうか。私が思うに一方に持たざる無産階級の恨み、もう一方に貧しい者に対する豊かな者の嫌悪感、すなわちこうした争いの根底には経済的な要因が横たわっているのである。キラーフアト運動が失敗に終わって以降、二つの宗派は別方向へ歩みだした。両者の結びつきは次第に弱まっていった。それはまず両派の上層部から始まった。なぜなら中産階級には経済活動上の競争が存在

したからである。両派の下層部にまで毒が撒き散らされるのは、ずっと後になってからである。

ニーロード・チョウドゥリーはこう自伝で述べている。

「私はラーム・モーハン・ローイ以降、偉大なベンガル語作家、宗教改革者、政治指導者と呼べる人物を誰も知らない。彼は総体としてのイスラーム、あるいはそのすべての側面について、あらゆる直接的な知識を有していた。ところがムスリム支配が終わると、ヒンドゥー社会はイスラームとの関係を全く絶ってしまった。奇妙なことのようだが、イスラーム文明に関するかつての我々の知識は、現在我々がヘレニズム文明について知っているよりも乏しかったことだろう。

真の保守主義ないしは確立された保守主義の伝統に忠実だったために、バンキム・チャタルジー(註86)もヴィヴェーカーナンダ(註109)も、宗教こそが人類の積み上げてきた活動を支える要石であると考えた。兩人とも、純粋に非宗教的な文化というものを断固として拒否した。彼らはブラフマ・サマージと対立した。これら二つの潮流が近代インドの精神をめぐって争った。いやしくも思考する能力を有する近代インド人で、自己の内面においてこの相克を経験しなかった者は皆無に近いだろう。ヒンドゥーの自由主義者であるタゴールですら、自由主義者の名に値するヒンドゥーがいたとすれば彼だろうが、バンキムとヴィヴェーカーナンダによって復興された新しいヒンドゥーイズムに惹かれるところとなった。「ゴーラー」という彼の小説はそのテーマを扱ったものに他ならない。ベンガル分割令に反対する民族主義者の運動がその頂点に達した時(1907年)には、ヒンドゥー保守主義はすでに明白な勝利を収めていたと言えるだろう。そしてその勝利の有力な決め手になったのは政治である。

後年私(ニーロード・チョウドゥリー)はサー・ヴァレンティン・チロル(註110)の『インドの不安』を読んだ。チロルの名はその著書ともども我々には嫌悪の対象として教えられてきたが、実際に彼の書いているところを私自身の記憶と照らし合わせてみると、ヒンドゥーの復興としてのスワデーシー運動に対するその評価はおおむね正しいと認められる。スワデーシー運動はインド国民会議派の指導者たちの自由主義的な政治思想ではなく、19世紀の終わり四半世紀に生まれたヒンドゥー復興主義だった。すなわち、もともとほぼ宗教分野に限定された運動だった。そして宗教こそが、1905年以降数年間に及ぶ分割反対闘争の推進力だったのである。

ヴィヴェーカーナンダは言った。『ムスリムのインド征服は踏みつけられた貧しい人々に解放をもたらした。だからこそ、我々のうちの五分の一までがイスラームに改宗したのである。そうさせたのは剣の力ではなかった。それがすべて剣や火によるものだと考えるのは、見当違いも甚だしいだろう。』と。このヴィヴェーカーナンダとラーム・モーハン・ローイの間に位置するのが、ヒンドゥー民族主義の創始者たるバンキム・チャンドラである。バンキムの大衆性はガンディーの場合と同じ理由によるものだった。

1905年のスワデーシー運動は主として復興された新しいヒンドゥイズムによる民族主義の主張だったが、同時に、化石化した古い民族主義の復興にも大いに力を発揮した。だからこそスワデーシー運動が進展するにつれて、インド大反乱が夢想とっていいほどにまで美化されだしたのである。そしてとうとう、大反乱が今世紀の民族主義運動の先駆であり、最初のインド独立戦争だったという伝説まで生まれるに至った。」と。

ネヘルーは「インドの発見」の中でこう述べている。「反抗は本質的に民族主義的なものであり、従って民族主義の強さと偏狭さの両面を有していた。宗教と哲学、歴史と伝統、慣習と社会構造などが組み合わさり総体として、インドの生活のほとんどすべての局面を網羅していた。それはブラフマニズムないしは（後の用語で）ヒンドゥイズムと呼びうるものだが、民族主義の象徴となったのである。」と。

ニーロード・チョウドゥリーの見解とは多くの点で私は異なっていた。それは恐らく私たちムスリムの青年には、長い間ヒンドゥーの心の奥までは理解できなかったからだろう。両宗派間のあらゆる暴動が発生してしまった後でさえも、私がカルカッタへ出た際に同郷のビクロモブル出身のヒンドゥー家庭を訪ねると、どこでもつゆ変わった様子など見られなかった。ある時サー・ジャグディーシュ・チャンドラ・ボース(註11)の家を訪ねたが、そこでもやはり以前と同様、アブラー・ボース夫人の作ってくれた熱々のルチ（揚げパン）やヴェジタリアン料理を食べないうちは帰してもらえなかったのである。

1926年に私は家庭の事情でポリシャル(註12)で勉強することになった。当時ポリシャルは小さな町だった。だが、その頃のダッカに較べるとたいそう美しかった。馬車や馬は少なかった。川べりの散歩道はダッカのバックランド・バンド(註13)よりずっと美しかった。道の両脇には青々とした草が生い繁り、片側には大きなモクマオウの木が立ち並んでいた。風が吹くとモクマオウの木がさざめいて詩を吟じているようだった。だからこそ詩人のナズルル・イスラム(註14)は、「ポリシャルはベンガルのヴェニス」と詠ったのだろう。蒸気船の発着場はダッカよりはるかに大規模で、四つか五つの埠頭を有していた。多くの船、艀、ランチが行き交っていた。発着場の近くの道はどこも石炭屑で覆われ、大勢の人でごった返していた。苦力と旦那のやりあう声、積み荷の上げ下ろし、慌しく動き回る旅人たち、笛の合図で隊を組んで出入りするドックの作業員・・・実に目を見張らせる光景だった。I. G. N. 社やS. N. 社の重役たちの宏壮なバンガローには季節ごとに様々の花が咲き乱れ、そこでは乳母車を引きながらアヤ（乳母）たちが子供たちにお話を聞かせていた。そして、フットボールの試合の行われるベール公園。そこでは冬になると夫婦連れの白人たちがゴルフに汗を流していた。ベール公園のすぐ裏手にはジラー・マジストレート（県の行政・司法長官）、ジラー・ジャッジ（県裁判所判事）、ポリス・スーパー（警察長官）などの高級官吏の宿舎が並んでいた。彼らの家のすぐ近くにヨーロピアン・クラブがあっ

た。もちろんベンガル人の I. C. S. (インド高等文官) も会員になることができた。B. R. シェーンやヌルッノビ・チョウドゥリなどのように。町の中ほどに巨大な池があり、人々は「ビビル・ブクル(奥方の池)」と呼んでいた。私がポリシャルの学校に入った時、県の行政・司法長官は E. N. ブランディ(後のベンガル州首席事務官)、県裁判所判事はイウニーだった。イウニーの時代に絞首刑を宣告された人間が最も多いのではないかと評判が悪かった。警察長官は後にベンガル州政府のインスペクター・ジェネラル・オブ・ポリス(警視総監)を務めたテイラーだった。私がポリシャルを去った時、県の行政・司法長官は J. T. ドノヴァン、県裁判所判事は T. S. エリス(後のダッカ高等裁判所長官)、警察長官がフェヤー・ウェザーだった。そしてアシスタント・ポリス・スーパー(警察長官補佐)に、後年パキスタン政府の閣僚を務めるシャムシュッドハがいた。

ホリンベリーは船会社の重役だった。私は次のようないきさつで彼と知り合いになった。毎年行われる学校の運動会の準備で、教頭先生から障害物競走用の樽を調達するよう命じられたのだ。蒸気船の発着場へ行けばたくさんあるから、と。教頭先生は私が英語がうまいので適役だと考えたらしかった。私もダッカの学校の先生方に教わって、自分が「スマート(出来る)」生徒だといささか自惚れていた。ホリンベリーに会って早速切り出した。「僕たちの運動会のためにピバ(樽)を少し分けてもらえないでしょうか。」そこでだけベンガル語で言ったピバ(樽)の意味が相手に通じなかった。苦勞してどうにか説明すると、こう言われた。「何だ、バレル(空樽)が欲しかったのかね。」私はひどくばつの悪い思いがした。だがそのことは、学校へ帰っても誰にも内緒にしておいた。それから川岸で私を見かけるなり、ホリンベリーが話しかけてくるようになった。一、二度ピバ(樽)の件を蒸し返されてからかわれたこともある。ペール公園の川寄りの一画に法廷弁護士のリトゥフェ・アリが住んでいた。彼には奥さんのウィルフレッド・アリ、二人の娘のミミとベビ、二人の息子のフォズレ・アリとアミル・アリがいた。彼のバンガローは葦葺きの美しい八つの屋根を持つ作りだった。チーク材のテーブルが置かれ、内部は四つの部屋に仕切られていた。川寄りの他の一画にはディプティ・マジストレート(行政・司法次官)のカーン・バハドゥル・アブドゥル・バシエトの平屋建てがあった。私は初めペール・イスラミヤ寮に寄宿し、後にこの家に移った。リトゥフェ・アリの四人の子供たちは私の友達だった。バシエト家の三人の息子と私は、いつも彼らと一緒に遊んでいた。というのは、そこは市の中心部からずいぶん遠かったからである。ミミは私と同年だった。ぜひ彼女を嫁にと引く手あまただった中で、先述したシャムシュッドハにミミとその両親の目が止まった。しかし私は、シャムシュッドハが既婚者であることをこっそりミミに告げた。それで、その話はすっかり立ち消えになってしまった。ミミは目の醒めるような美人だった。深く青い目、黒い髪、健康な白い肌。

当時のポリシャルのムスリム指導者はカーン・バハドゥル・ヘマエト・ウッ

ディン・アフモドとチョウドゥリ・モハッモド・イスマイルだった。アブドゥル・バシェトは行政・司法次官としての名声は大してなかったが、ピール（聖者）、カリ（コーラン読誦者）（§115）、モハッデス（ハディース伝承者）（§116）などとして人々に知られていた。当時ポリシャルの行政・司法次官を務めた人物で彼以外に私が覚えているのは、ショイヨド・モヤッジェム・ウッディン・フシェン・チョウドゥリ（後のベンガル州政府閣僚）とハミドゥル・ロフマンである。三人はそろって敬虔で厳格に戒律を守っていた。その頃のコロニゼイション・オフィサー（開拓官）はアブドゥル・モジドだった。彼はヨーロッパ人のような背広とネクタイを身に着けていた。その息子のアフタルッジャマンは後年インド高等文官になり、フマユン・コビル（後のインド政府閣僚）の娘と結婚した。パキスタン建国に際して彼はインドを「オブション（選択）」した。ショイヨド・モヤッジェム・ウッディンの息子のジャラル・ウッディン・フシェン・シェケンダル（後に県裁判所判事）は私と同じクラスで勉強していた。彼はルンギ（腰巻き）の上にバジャマとアチカンを着て登校していた。そして昼の礼拝の時刻になるとズボンと上着を脱ぎオジュ（垢離）をとってから礼拝していた。そのことで他の生徒たちがずいぶん悪戯したり、からかったりしたものだ。それを知った教頭のドゥビジェン先生はシェケンダルに礼拝用の部屋を与えた。カーン・バハドゥル・アブドゥル・バシェトの宿舎では、木曜日ごとにコトム（コーランの朗詠）とジキル（唱名）（§117）が行われていた。彼には大勢の弟子がいたが、そのほとんどは彼に取り入るのが目当ての者たちだった。

シャエスタバードのナワーブの世継ぎであるショイヨド・モハッモド・フシェンのことは今もよく覚えている。なかなかの奇人だった。いつも夕方になるとイヴニング・ウォークと称して散歩に出ていたが、その時の格好がカーキ色の単パンツに半袖シャツ、頭にヘルメット帽（§118）、手にはステッキと西洋犬というものだった。大学の学位こそ持っていなかったけれど、およそ英文学の本で彼の読んだことのないものはなかったほどである。もっとも古英語からチョーサー、ラングランドまでの時代は別として。それぞれの作品ごとの様々の版本が彼のライブラリー（書庫）には揃っていた。とりわけモロッコ皮の装丁で薄いイギリス製の紙を使った本が、大のお気に入りだった。夕方川べりを散歩する以外はほとんど一日中、本に埋まって生活していた。彼はディケンズとサッカレーの美しいモロッコ皮装丁の本を、「ケンブリッジ版英文学史」と一緒に、読みなさいと言って私に呉れた。シェイクスピアのポケット版などは、今でもたくさん手元に残っている。後年大使として外国に赴任する際、私はささやかな蔵書を人に託したのだが、その人の不注意でそれらの本は全部白蟻に喰われてしまった。もっとも我々の間では、借りた本は誰も返そうとしないのが通例だったけれども。

ナワーブの世継ぎに関しては多くの逸話があるが、本人から直接聞いた次の話だけはぜひ書き留めておきたい。イギリスのあらゆる著名な出版社に彼は手紙を書いて、英文学の新刊本が出たらすぐに一冊、サーフェス・メール

（海陸輸送郵便物）で送るように言いつけてあった。ある日「ステーツマン」の書評欄を読んでいると、ふと彼は手元にまだ届いていない本の書評が載っているのを見て驚いた。早速翌日カルカッタへ出てインペリアル・ライブラリー（帝国図書館）で捜してみたが、そこにも本は届いていなかった。図書館の司書は、シャエスタバードのナワープの世継ぎのところへ行けば本は見つかるでしょう、と教えた。ナワープの世継ぎはさらりと言ったのけた。「ところが、あいにく私の書庫にも届いてませんでね。」司書は仰天した。ナワープの世継ぎの名前と噂は聞き及んでいたが、まさか直接お目通りできようとは思ひも寄らなかったからである。司書は、部屋に入っておかけくださいと勧めた。だが時間がなかった。「よし、ステーツマンの事務所になら届いているかもしれない。」言うなり世継ぎはタクシーを掴まえて走らせた。「ステーツマン」の編集長は、世継ぎの来訪が告げられると部屋へ招き入れた。そして、レビュー（書評）はロンドンから届きましたが本はまだです、と知らせた。世継ぎはポリシャルへ帰った。そして数日後に出版社から本が届いた。当時のムスリム社会にあって、彼こそは真の文学愛好家だった。いつも度の強い眼鏡をかけていた。ところがまたこの人物が夕方川べりを散歩する際には、日没の礼拝の時刻になると、垢離も取らずに短パンツのままでヘルメット帽を前に置き、ムスリム帽も被らずに礼拝するのだった。だからといって、モウルヴィーやムッラーが彼を非難するのは聞いたことがない。というのは彼を見たとき、批判しようなどという気持ちは失せてしまうからである。ナワープの世継ぎ自身は家庭を持たなかったのも、弟のショイヨド・ネハル・フシェンに嫁を取らせて子孫を儲けた。私の記憶では当時ネハル・フシェンは法律を学んでいた。彼は美しく教養溢れるシュフィヤ・ベゴムを娶った。当初恥じらい深い嫁に過ぎなかった彼女こそは、後の女流詩人シュフィヤ・ネハル・フシェンである。夫のネハル・フシェンは夭折した。私の記憶では肺結核を患っていた。当時それは不治の病だった。女流詩人シュフィヤ・ネハル・フシェンは、夫を失ってからずいぶん後に再婚した。そしてシュフィヤ・カマルの名で大変な名声を博した。私が再びダッカへ出た時には、ネハル・フシェンはこの世になかった。フシェン家の消息は久しく入ってこなかった。1962年にベゴム・シュフィヤ・カマルと再会した時、彼女はかつての若いノトゥン・ボウ（新嫁）ではなく、民族主義に目覚めた高名な女流詩人だった。昔のことは、もはや心に残していなかった。

カーン・バハドゥル・ヘマエト・ウッディン・アフモドは、ムスリム社会の理想をひたむきに信じていた。一方チョウドゥリ・モハम्मド・イスマイルは根っからのジョミダールで、かつ金の力で政治家になった人物だった。ポリシャル県の指導者たちがポリシャルの町を訪れると、まずほとんどイスマイルの客人になった。ガーンディーや、ジョウンブルのマオラナ・アブドゥル・ボロもまた同様だった。

ポリシャルへ移って気付いたのは、ダッカと違って子供たちがホッケーやクリケットをして遊ばないことだった。ポリシャル・クラブ以外ではテニス

も行われなかった。人気があるのはフットボールだった。試合に勝とうと、皆大変な熱狂振りだった。相手の有力プレーヤーを追い払うために、毎年シーズン初めには決まって乱闘騒ぎが起こった。死人こそ出なかったが、中には大怪我をした者もいる。

ダッカの街ではヒンドゥーとムスリムの少年の間の交流は、ほとんど見られなかった。ヒンドゥーの少年たちはムスリム居住区へ行かなかったし、ムスリムの少年たちもヒンドゥー居住区へはまず近寄らなかった。ムスリムの少年がヒンドゥーの娘と、反対にヒンドゥーの少年がムスリムの娘と親しくなることはなかった。もっともダッカ大学が男女共学になってからは、幾らか事情も変わったけれども。ダッカのムスリムの良家では、ボルダの制(§66)が堅く守られていた。貧しい人たちですら外出の際にボルカ(ヴェール)を着用していたほどである。ダッカのヒンドゥーの娘たちはボルダを守らなかった。それでも早朝ブリゴンガ川(§119)で沐浴するとき以外に、彼女らが居住区の外へ出ることはめったになかった。ところがポリシャルでは事情が異なっていた。とりわけ教養のある家庭や公務員の家庭の場合、男女の交流には何ら障害がなかった。親たちはダッカと違い、子供たちのこの種の問題について概して開放的だった。ポリシャルのブラフマ・サマージの家庭と、私はたいそう懇意になった。その家の主人のラジクマル・ゴーシュは詩聖タゴールにそっくりだった。髭の毛も顎髭も肌の色も詩聖に生き写しで、違いと言えば服装ばかりだった。私は幾度かわが目を疑ったほどである。彼の長女のマルティ・ボーシュは寡婦だった。彼女には息子が一人と、リティカ・ゴーシュという私と同年の妹がいた。リティカはまだ独身だった。私にとってその家は、わずかの間にわが家同然となった。マルティ姉さんに揚げパンを揚げて下さいと頼むと、いつも大喜びで拵え、よそってくれた。何かの都合で私が行かない日でもあれば、次の日にはゴーシュ家の誰かが訪ねてきてくれた。ブラフマ・サマージの祭礼があると、私も必ず一緒に出かけた。

ポリシャルにチャール・ラエという名の弁護士がいた。行政・司法次官のバナウッラハとジラー・スクール・インスペクター(県視学)のアフタブディンは、弁護士宅のすぐ裏手にそれぞれ家を借りていた。バナウッラハの義弟のモヒウッディンがチャール弁護士の娘のショブナ・ラエと近づくになり、やがて二人は愛し合うようになった。ショブナの手になるたくさんの手紙を、モヒウッディンは私に読み聞かせてくれた。ショブナは薔薇の花に言葉を書きつけて、モヒウッディンに贈ったのである。ショブナのたつての頼みで、とうとう二人は駆落をした。チャール弁護士は事件を明かるみに出すまいとした。しかし話はカルカッタにまで伝わり、ヒンドゥー系の新聞に載って一大騒動になった。およそ二箇月後に二人は警察に保護され、ポリシャル裁判所で審理が始まった。刑事事件を専門とするポリシャルの著名な弁護士ハシム・アリ・カーン(後のベンガル州政府閣僚)が、モヒウッディンの弁護に立った。証拠書類として法廷に提出されたショブナの手紙はすべて、「恋の罠に嵌められた女の顛末記」という題名で、カルカッタ・アクラム・

カーン社から本として出版された。というのは、この事件を契機にカルカタで宗派間の暴動を挑発しようとする動きがあったのである。医師がショブナはまだ成年に達していないと証言した以上、モヒウッディンの有罪は動かしがたかっただろう。しかしそうなったのは、むしろ忌わしい宗派対立の空気によるところ大であった。それは1926年を境に、徐々に地方の諸都市に広まっていった。だが驚くべきことに、この事件の係争中も私のヒンドゥー家庭との個人的な付き合いには、いささかの变化も生じなかったのである。

マスジドの真前の通りをヒンドゥーたちが鳴り物を打ち鳴らして強引に練り歩こうとし、ムスリムはムスリムでヒンドゥーの目に付くところで牛を犠牲に捧げる。こうしたことが原因となって、ポリシャルでは宗派間の暴動が起こり始めた。最も悲劇的な事件は1927年、クルカティにあるボナバリヤのマスジドの門前で起きた。ポリシャルの著名なヒンドゥー指導者ショティン・シェーン（後のポリシャル・ kongress議長）の指揮するデモ隊が、ムスリムの礼拝の時刻にマスジドの前に差し掛かった。ムスリムはそれを阻止する構えを見せた。警察は事態をすでに午前中から察知していた。あらかじめ報告を受けていた県の行政・司法長官E. N. ブランディ、警察長官テイラー、それに当時警部に昇進していたブトナトが現場で待機していた。ムスリムはデモ隊が鳴り物を鳴らしながら進むのを阻もうとした。ついに刑法144条(§120)違反で、ムスリム側に退去が命じられた。しかし、一向に立ち去らなかった。その時である。行政・司法長官の発砲命令が下り、17人のムスリムがその場で犠牲になった。またマスジドの中にいたムスリムも多数の負傷者を出した。この事件はポリシャルのムスリムに、過激な運動を呼び起こす結果となった。これより少し前、ポトゥヤカリ(§121)で起こった事件にも触れておく必要があるだろう。当地の行政・司法次官のアブドゥル・ハリム・チョウドゥリが夜明けの礼拝を終えてマスジドから出たところを、ショティン・シェーン本人が鉄棒で襲ったのである。棒は頭ではなく右肩に命中し、ハリム・チョウドゥリは地面に倒れた。後年彼の子供であるコビル・チョウドゥリとムニル・チョウドゥリ、ナデラ・ベゴムらは宗派主義に反対し、世俗主義を信奉した。だがムニル・チョウドゥリは、1971年ボドル・バヒニの手で殺害された。

ポリシャルのムスリムたちはカーン・バハドゥル・ヘマエト・ウッディンを歓迎委員長として、全ベンガル・ムスリム会議を開催した。サー・アブドゥル・ロヒムが議長を務めた。だが最も強烈な印象を私に与えたのは、ボルドマン(§122)のアブル・カシェムの演説だった。この運動の盛り上がりのなかで、先の発砲事件の糾明委員会が設けられた。法廷ではA. K. ファズルル・ハックがブランディとテイラーの二人の反対訊問に立った。ファズルル・ハックの反対訊問の巧みさを、その時初めて私は目にした。委員会の調査報告を政府は決して公表しなかった。それどころか日ならずしてブランディはコミッションナー(§123)に、テイラーはD. I. G.（副警視総監）にそれぞれ昇進を果たした。私など反対訊問の際には、両名とも職を解かれるのではないか

とすら思っていたのだが。当時ベンガルのムスリムの発行する日刊誌は一誌もなかった。もっとも少し後には、カジャ・ナジムッディンやカルカッタ在住の非ベンガル人ムスリム事業家たちの努力によって「スター・オブ・インディア」という日刊誌が発刊されたが、それはカルカッタ以外では普及せず、影響力もそこだけに限られていた。地方にはこの新聞の通信員すらいなかった。そのため糾明委員会の明瞭な報告を、ベンガルのムスリムは詳細に知ることができなかった。ヒンドゥー系誌による一方的な情報しか得られなかったのである。

その頃ポリシャルではテロリストの活動が活発になっていた。私も柔術やナイフ、棒術などを習っているうちに、そうした者たちと知らぬ間に関わりを持っていた。だがナイフの相手のロメシュが暗がりにナイフを振るい、警察署の近くでジョティン警部を刺殺してからは、気を付けるようになった。この事件のわずか数日後には、私のもう一人の友人でまだ学校の生徒だったバニビトが、県の行政・司法長官のドノヴァンを狙撃した。しかし失敗に終わり、彼は逮捕された。ロメシュもまた逮捕されて終身禁固刑を宣せられた。もちろんそれから後も私は、種々の催しの中ではナイフや柔術の腕を披露して見せたが。

非暴力不服従運動が展開する一方で、過激派によるテロ活動も絶えなかった。チャッタゴン、ダッカ、クミッタなどから命知らずのテロリストたちの話がポリシャルにまで伝わってきた。娘たちまでがテロリストの運動に加わっていた。一例を挙げよう。デブプロシャド・ゴーシュはいかなる試験であれ二番以下に落ちたことがないという高名な数学教授だったが、その末娘のシャンティ・シュダ・ゴーシュは私たちと同年だった。ある朝私たち数人が教授の家でおしゃべりに興じていると、警官隊がきて家を取り囲み、家宅搜索をしようとした。警部は令状を示すと、謹厳な面持ちでシャンティ・シュダの身体検査をした。シャンティ・シュダは当時、ポリシャル・プロジモホン・カレッジの文学士コースで学んでいた。警官たちは家宅搜索を開始した。警部はシャンティ・シュダの書斎へ入り、銃剣の先で壁のレンガを一枚外した。すると、そこから拳銃二丁と空の葉莢が一つ現れた。シャンティ・シュダは手錠を掛けられて連行された。家宅搜索で見つかった物件も押収された。もちろん、それらのリストも作成された。私たちの中には署名を取られた者もいる。これはずっと後になって分かったことだが、シャンティ・シュダの末弟のクムドがつい口が滑べるか、あるいはいい格好をしようとしてある友人に秘密を漏らしてしまい、それを警察に嗅ぎ付けられたらしい。

私たちは午後いつも川べりを散歩していた。下宿の主人のアブドゥル・バシェトは、実によく仕付けられた馬を一頭飼っていた。そこで午後になると私たちのある者は馬に乗り、ある者は犬を散歩させたものである。行政・司法次官は犬も三匹飼っていた。タイガー、プリンスそしてヴォルガである。その日は私がショライル・ハウンド犬の鎖を握っていた。ちょうど県裁判所のエリス判事も、フォックステリア犬を連れて散歩に出ていた。ところが私

がぼんやりしている隙に鎖が手から離れてしまった。グレイハウンド犬はエリス判事のテリア犬に飛びかかりざま咬みついた。エリスは手にしたステッキで滅多打ちにしてテリア犬を逃がした。テリア犬は首から血を流していた・・。その時どこからかミミが駆けつけてきて、私たちの犬を取り押えた。そして、素知らぬ顔で作りごとを言った。私の不始末で犬が離れてしまいました。何とお詫びしたらいいのでしょうか、と。独身主義者のエリスが若い女性に対して大いに「シヴァルラス（騎士道精神を発揮）」したのは当然だった。命拾いした私は、ほっと息をついた。ミミには本当に感謝している。

キラファット・不服従運動の時代に創設された国民教育機関は、その頃ほとんど壊滅しかけていた。それに止めを刺したのが、カルカット大学の副総長サー・アシュトシュ・ムカルジだった。入試の合格点を百点満点の八十点までいきなり引き上げたのである。そのため国民教育機関で学んでいた多くの生徒は、再び英語学校へ戻ってしまった。

この時、私たち若者をあっと言わせるニュースが届いた。当時私たちはまだ飛行機を見たことがなかった。アメリカの飛行士リンドバークが大西洋越えの3600マイルの航路を33時間で飛んでパリに着いた、と新聞が報じた。まるで「おばあちゃんの知恵袋」の本の御伽話を聞いているような気がした。

同じく1927年、ソ連でスターリンとトロツキーの権力闘争が展開されていると新聞が報じた。またトルコのケマル・パシャがムスリムの宗教儀礼を禁止して、ヨーロッパ化を計ろうとしているというニュースも伝えられた。

下宿ではいろいろと勉強に支障をきたしたので、私は再び元の寄宿寮へ移った。寮の舎監は上級モウルヴィーの老人だった。映画見物は堅く禁じられていた。だが私たちも何とかして見に行こうとした。夜九時半からの上映を狙うよりほか、チャンスはなかった。そこで私たちは八時半のエシャ（夜半）の礼拝を終えるなり、いったん床に就くふりをした。夜半の礼拝は必ず参加しなければならなかったが、多くの生徒は集団礼拝が始まったとたん後ろから抜け出していた。そんなに早く寝たのでは勉学に差し障るだろうと舎監に意見されると、私たちは英語の先生に教わった教訓詩で切り返した。

「早寝早起きは

健康 富 知恵を人にもたらすなり」と。

舎監は詩を作る趣味があったので、詩人に対して格別の敬意を払っていた。そのためこれを言われると、早寝については一言も説教できなくなるのだった。そして九時頃になると私たちは蚊帳を吊り、長枕のシーツを被せて明かりが洩れないようにしてから、デッキの柵を越えて脱走するのである。一度危うく掴まりかけたことがある。真夜中に私たち数人が柵を越えてちょうど中へ降り立った時である。誰だ、そこにいるのは、という舎監の声が響いた。こんなに遅く舎監が見回することはなかったはずなのに、その夜に限ってどういう訳か部屋の外に立っていた。いったい何をしているのか、と訊かれた。どうやら柵を越えるところまでは見られなかったらしいので、私たちはしゃ

あしゃあと嘘をついた。友達が手洗いに言ったのですが、暗くて怖がるので、ここで番をしているのです。泥棒は平気ですが、幽霊が出るといけませんから、と。舎監は「アスタグ・ベルッラ（滅相もない）」と唱えながら部屋へ引き上げた。私たちは舎監の機嫌を取ろうとして、よくその詩を誉めた。いくつか暗唱した詩もある。今も一つ二つは覚えている。

「ボッダ河岸(註124)にてムスリムは
幾百のヒルシャ魚(註125)を漁（すなど）りて
バザールにて鷺（ひさ）ぐ 絶ゆることなく
ムハンマドは神の使徒なり」
とか

「聞け わが女たちよ
身も世も捧げ
汝の夫に尽くすべし
ムハンマドは神の使徒なり」

舎監は自腹を切ってまで詩集を印刷し、一部4パイサーで売っていた。外部の人が買ってくれたかどうかは知らないが、寮生はみんな買ったものだ。

1927年の末に、母のたった一人の弟(註126)が結核に冒された。カルカッタから郷里へ帰るなり、その叔父は母に会いたい一心で手紙を書いた。ところが父が、その手紙を隠してしまった。父が母を実家へ帰したのは、叔父の死の知らせが届いた後のことだった。もちろん、母にはその知らせは伏せたままにして。母は実家へ着いて初めて、数日前に叔父が帰らぬ人となったことを知った。叔父の死後わずか二週間のうちに、息子二人も同じ病気で後を追った。この世で一人きりの弟の死目にすら会えないとは、母にとって誠に悲運というほかなかった。父にすれば、よもや結核患者がこれほど早く亡くなるうとは思わなかったのかもしれない。しかし、以後母は死ぬまでその悲しみを忘れることができなかった。彼女は弟をこよなく愛していたのである。1928年の年頭に私は帰省した。ところが家へ着くやいなや、詩人のカーギー・ナズルル・イスラム(註114)がムスリム文学会の年次総会に出席するためにダッカを訪れている、という知らせを受けた。もはや村に留まってなどいられなかった。ただちにダッカへ発った。歓喜のうちに送った十日あまりのことは決して忘れられない。今でも詩人の朗詠、朗唱、笑い声などが耳元に蘇ってくるようだ。

1928年に私は腸チフスを患った。当時この病気の治療法は何もなかった。クロロマイセチン系の特効薬はまだ開発されていなかった。医者たちもただお腹を大切にさせる以外に打つ手がなかった。私の熱は一向に引く気配がなかった。一箇月ばかり寝台に寝たきりだったので、私は床擦れを起こした。日が経つにつれ壊疽はますますひどくなっていった。二箇月が経過した。もはや私が助かる望みをかける者もなく、皆、いつ事切れるかとそのみを案じていた。しかし母だけは望みを捨てなかった。約二箇半月にもわたって夜も寝ずに看病してくれた。母は看護を決して人に任せようとしなかった。

私も母がしばらくでもいてくれないければ、不安で仕方がなかった。ある日家に来客があったので、母はピラフと卵カレーを用意した。客たちは私の病室の隣の部屋で食事を摂った。母が客たちの接待をすませてからのことだった。私は必死の思いで隣室へたどり着き、皿に盛られたピラフを平らげた。そして茹で卵入りのカレーを食べ切った時である。叫び声を上げながら母が入ってきた。母は私を抱き抱えるようにして寝台に寝かせた。その両目から涙が垂っていた。この時初めて母は私が助かる見込みがないと確信したのである。ところが驚いたことに、その日を境に私は徐々に快方に向かいはじめた。髪の毛はすっかり抜け落ちてしまった。両足はガリガリに痩せ細っていた。二度と歩けそうな気がしなかった。なぜなら熱が引いてからも一箇月ほどは、誰かに支えてもらわなければ立つことすらできなかったからである。学年末試験までわずか数日を残すばかりだった。だがいつも成績が優秀だったので、御見舞に来て下さった教頭先生が、君は試験を受けるには及ばない、そのまま進級してもらおうと言って下さった。私の病気を知った親類が家へ引き取って養生させてくれた。私はすっかり良くなったが、今度は母の具合が悪くなった。そして次第に伏せりがちになった。私は本復したので、再び寄宿寮へ戻された。母の病状は日を追うごとに悪化していった。ついに健康を回復することはなかった。1929年に母は浮世の迷妄を絶って、帰らぬ人となった。享年40才だった。母の死とともに、家と私を繋ぐ絆もすっかり絶たれてしまった。母は亡くなる数日前に私を呼んで、涙ながらに言い遺した。「私の一生は苦しみ連続だった。その訳はお前は知らなくてもいい。ただ、私の言いつけをしっかりと守っておくれ。決して賭け事をしないこと、酒に手を出さないこと、いかがわしい場所に出入りしないこと。」それからこう付け加えた。「弟や妹のことを頼んだよ。」父のことには一切触れなかった。私は今日までその教えを守ろうと努力し続けている。

母と父では政治的な思想もまったく異なっていた。反ガーンディー主義者の父は、アリー兄弟に対して幾分の反感を抱いていた。というのは父の考えでは、ムスリムが教育面で前進しはじめたちょうどその時に、アリー兄弟が若者たちに学校やカレッジを罷めさせて、せっかくの成果を台無しにしてしまったからである。ある晩私が床に就こうとしていると、父が呼び寄せてこんな話をした。わがビクロモプル住民の誇りである「デーシュボンドゥ」ことチットランジャン・ダース(§105)やサロージニー・ナイドゥー(§127)、サー・ジャグディーシュ・チャンドラ・ボース(§111)、サー・チョンドロマドブ・ゴーシュ(§128)らは、インドのみならず広く世界にその名を知られている。しかるにビクロモプル出身のムスリムで、これほどの崇敬の念をもって記憶されている人物はただの一人もない、と。きっと父は私が勉強してこれらの偉人と同じ道を歩んでほしいのだな、そう私は思った。また父には、「学校やカレッジを罷めよう」のスローガンは kongress の策略にすぎず、アリー兄弟はムスリム子弟の教育が進んだまさにその時に、kongress を盾に使って運動の旗振り役を務めたのだという不満もあった。どこかの国のカリフの

ために、どうして自国のムスリム子弟の将来を犠牲にしなければならないのか、父にはまったく理解できなかった。

母は違う種類の人間だった。父は使用人や下男・下女に対しては厳しい態度で臨むべきだとする考えの持ち主だった。母はその反対で皆に「おかみさん」と呼ばれるのが何より嬉しかった。わが国では当時ですら人身売買が行われていたが、母が端女を折檻するのは一度も見たことがない。よその家では下女の手や頬に熱く燃える鉄串を当てて、焼き印を押すことさえ珍しくなかったのだが。

母はチョルカ（糸車）で糸を紡ぎ、それを機織りに渡して服を縫わせていた。いつもコッドル（手織り木綿）を身に着けていた。自分で気に入っていたのか、それともデーシュボンドゥの教えに従っていたのかは分からない。母の兄がデーシュボンドゥの愛弟子だった。私のこの伯父はテロリストと関係があった。そしてその罪で7年の刑を宣告され、服役中に死亡した。この伯父の掲げた理想に感銘を受けて私が現在の道を選んだのは、大いにあり得ることである。当時は私も真鍮のつむに糸を紡いで喜んでいて、ほとんど遊びのつもりだった。しかし、こうしたことはすべて父の目には度を越していると映った。ある日祖母が母に訊いた。「お前さん、そんなに重い服を着て、水を浴びる時、困らないかい。」母は小声で答えた。「いいえ、お義母さん。私は厚手の服が大好きなんですよ。」母は父が町で買って帰る外国製の服とかダッカやシャンティプル産のサリーは、晴れ着にしか用いなかった。

まさか母が蓄財しようとは、誰もが想像していなかった。いつもゆったりした風なので、金銭に対して格別執着があるように見えなかったのだ。それが、ある日分かった。政府が千ルピー紙幣と百ルピー紙幣を「ディモンティゼーション（通用禁止）」するという布告が、突如新聞に発表された。私たちは新聞でその言葉を見つけはしたが、意味まで考えようとはしなかった。大きな太い文字で書かれたその囲み記事を、私たちは何かの広告ぐらいに考えていた。ところが父が、一両日中にダッカへ出かけると言い出した。手元の百ルピー札を急いで預金しなければならない、翌月には使えなくなってしまうから、と。母はびっくりして言った。私もお札を持っているのですが、と。見ると、外国製の服や高価なサリーを畳んだ間に、たくさんのお札が挟みこんであった。父はそれらを預金するために受け取った。だがその金が決して返ってこないことを母はよく知っていた。もちろん、その通りになった。それでも父は、母のために数枚のギニー（金貨）を買って帰った。母には装身具の持ち合わせは十分あったのだけれども。その金貨以外に母が装身具を身につけることはなかった。

毎年入学試験の時期になると私たちはボリシャル川の岸辺に陣取って、道行く若者のうち誰が受験生だろうか、とか彼らのうちどれが村の出身者でどれが町の出身者だろうか、などと評判したものである。新品のシャツと服、櫛を入れてきれいに分けた髪、それに卸したての慣れない靴を履いてたどたどしく歩く姿を見ると、私たちは単に興味を掻立てられるだけではすまなかつ

た。自分の方でもたどたどしい足取りで彼らに近づいて行き、君はどここの学校の出身ですかと尋ねたものである。そして、いつも大笑いになった。私たちは入学試験に受かってカレッジへの入学を果たしたその日に、いろいろな生徒について評判した。中で一人だけ皆の注目を集めた生徒がいた。結局その生徒について、私たちはいかなる結論を出すこともできなかったけれども。彼の顔には輝きがあった。肌の色は白く、靴は真新しかった。ついこの間まで高校生だったらしく、やけに真面目そうに見えた。彼は座って書類を書き終えると事務員に提出し、寄宿寮の方へ歩いていった。

入学試験が終わると、私は国際政治に関心を持つようになった。国際関係のニュースが「ステーツマン」の紙面を賑わしだしたのは、実はその頃からだった。ドイツの陸軍元帥フォン・ヒンデンブルグの名が不吉に響くばかりではなかった。ドイツについてもっと多くを知りたいという思いが私には募った。ヒンデンブルグとともに、ルーデンドルフ将軍やヒトラーの名前も知った。第一次世界大戦で敗北を喫してから、ドイツは再軍備をしないと宣言して戦勝国を安心させてきた。しかしこれらの軍人たちは、それを本心では認めていなかった。当時ドイツでは右翼と左翼が勢力争いをしていた。

すでに10年代の初頭から、イタリアではベニトー・ムッソリーニの動きが世界の注目を浴びていた。1924年にイギリス国王ジョージ5世はムッソリーニにG. C. B. (§129)を授与した。彼は前年にギリシャのコルフ島を占領し、国の最高指導者になっていた。

ソ連の革命指導者レーニンは病に伏した。大飢饉がソ連を襲っていた。「ステーツマン」の推計によれば、餓死者は二千万人に上っていた。

中国は無政府状態に陥っていた。「力ある者が国を制す。」これが各地の軍閥の領袖の考え方だった。この時、孫文博士は指導権を譲っていた。全アジアの目が孫文に注がれていた。

私は英語の映画が掛かるとよく観に行ったが、それは単なる鑑賞ではなかった。映画の台詞を聞くのは英会話の稽古のつもりだった。その頃私の好きな俳優はチャーリー・チャップリンとバスター・キートンだった。

ジンナーはインドの憲政改革問題 (§130)を解決するために、ムスリム連盟として14項目 (§131)の要求を提示した。その大部分は、バーケンヘッド卿 (§132)の発言に対する回答であるネヘル報告 (§133)への抗議だった。ムスリムの青年が14項目について格別熱心に議論した覚えはない。大学の状況は知らないが、地方のカレッジの学生は当時まだヒンドゥーとムスリムに明確に分かれていた訳ではなかった。

それよりも1929年、メーラト訴訟事件 (§134)の被告たちの行った法廷陳述をめぐって、私たちは何日も論じ合った。この被告たちは共産党のムザッファル・アフマド (§135)とダーンゲー (§136)の指導の下に、イギリス支配を武力によって転覆しようとしたのである。事件は一大センセーションを巻き起こした。被告たちの主張には、ヒンドゥーとムスリムの一体となった指導が貫かれていた。

1929年には全世界の国々が恐慌に見舞われた。失業問題は深刻化する一方だった。1924年以降ジュートの価格が上がり、わが国の産業が振興して経済発展が始まっていたが、恐慌によって大打撃を受けた。

同じく1929年、アフガニスタン国王アミール・アマーヌッラー(註137)の話が伝えられた。妻と卓球をするという話が。どうやら彼は、あまりに性急にアフガニスタンのケマル・パシャになろうとしたらしい。パッチャ・イ・サカーウ(註138)という凡庸な、だが並外れて勇猛な人物が彼を廃位させ、一時カーブルの玉座に就いた。

1930年には多くの事件が起こった。ガーンディーは製塩禁止法を犯すべく4月6日、歩いてキャンベイ湾に接するダーンディーに到着した。4月12日、ガーンディーは数名の弟子とともに逮捕された。同年7月には、この運動に加わった十万を越す人々が逮捕された。至るところでデモが行われ、酒屋や学校、カレッジの前にピケが張られた。毎日のように外国製の服が燃やされた。私たちのカレッジの入口にも娘たちが横たわって、中へ入らせないようにしていた。私たちは本を抱えたまま、つつ立っているよりほかなかった。アングロ・インディアンの巡査部長がバイクに乗って正門前に控えていた。ハンドルにはユニオン・ジャックが掲げられていた。巡査部長は、娘たちを追っ払えと部下たちに命じた。命令が下ると同時に、若者も娘たちも一斉にスローガンを叫んだ。「揚がれ揚がれ国旗、降ろせ降ろせユニオン・ジャック。」と。その時である。隙を窺っていた一人の無鉄砲な娘がバイクのハンドルからユニオン・ジャックをはずして投げ捨て、代わりに kongress の三色旗(註139)を取り付けた。どうと笑い声が起った。巡査部長は思わず後ろを振り向き、事態を覚った。彼は娘にいきなり平手打ちを食わすなり、三色旗を投げ捨てた。人々は激昂した。学生たちはレンガ片を投げはじめた。警官隊は警棒で襲いかかってきた。私たちは皆正門の中へ逃げこんだ。授業を受けていた者も騒ぎを聞いて駆けつけてきた。ところが一人だけ教室に残った学生がいた。入学の日にやけに真面目そうに見えた例の学生だった。気になるので名前を訊くと、ピロジュプル出身のトファッジョル・ホシェンという学生だと分かった。後に著名なジャーナリストで日刊誌「イッテファク」(註140)の社主兼編集長、文筆家として名を馳せた人物である。彼はジャーナリストとしてはマニク・ミヤンの名で知られている。

同じく1930年の4月16日に、シュッジョシェン(註141)の革命党がチッタゴンの兵器廠を襲撃した。この事件は若者たちの議論的になった。

サー・ムハンマド・イクバル(註142)が北西インドのムスリム多数州を統合してムスリム国家を樹立する提案をしたのも、やはりこの年のことだった。

イギリス政府はサイモン委員会の報告に基づいて円卓会議を招集した。 kongress は会議への参加を拒否した。主だった出席者の顔ぶれは、マーンニヤ・アーガー・カーン、ムハンマド・アリー・ジンナー、サー・ムハンマド・シャフイー(註143)、サー・ジャフルッラハ・カーン、モウラーナー・ムハンマド・アリー、ベーガム・シャーナワーズ(註144)などだった。藩王国の代表

はサー・アクバル・ハーイダリーとミルジャー・ムハンマド・イスマーイー
ル(註145)だった。私たちに最も深い感銘を与える演説をしたのは、モウラー
ナー・ムハンマド・アリーだった。彼はこう述べた。

「好ましからざるイギリスの手から独立を勝ち取るために、私はこの会議
に出席した。独立の実を得れば帰国するが、さもなければ帰らない。」彼の
この言葉は本当になった。彼は二度とインドへ帰らなかった。彼はエルサレ
ムの地に眠っている。第一回円卓会議は kongress の不参加のために、進行
できなかった。そのためガンディー・アーウィン協定が結ばれ、ガンディー
は第二回会議に kongress の全権代表として出席することを了承した。1
931年11月にガンディーはロンドンに到着した。サロジニー・ナイ
ドゥー女史が同行していた。アーガー・カーンの宿泊するリッツ・ホテルの
広間に全代表が集まって、一回目の会議が開かれた。ガンディーはほとん
ど議場に姿を現さなかった。彼は多くの時を個人的な話し合いに費やした。
ジンナーの懸命の努力にもかかわらず、ヒンドゥーとムスリムの間の問題は
何ら解決を見なかった。以後ジンナーは政界からの引退を決意し、ロンドン
で事業を始めたのである。

円卓会議に際してチョウドゥリー・ラフマト・アリーほか数名のケンブリッ
ジ留学生在がパンフレットを発行した。「Now or Never (今こそ)」という表
題だった。パキスタンという名の国家の樹立を最初に構想したのは彼らだっ
た。

1931年にウェストミンスター憲章が制定され、カナダ、ニュージーラ
ンド、オーストラリア、南アフリカ、及びアイルランド自由国は、あらゆる
問題について自ら解決する権限を与えられた。すなわち、王冠をコモンウェ
ルス(連邦)の唯一の統合者として仰ぐ自治領になったのである。これ以後
イギリス議会のいかなる法律も自治領には適用されないことになった。

1931年にはイギリスの動揺は経済危機に止まらず、政治危機にも及ん
でいることが誰の目にも明らかとなった。国王ジョージ5世は、ロイド・ジョ
ージとボールドウィンの二人に協力して仕事を進め、連立政府を作ってほし
いと要請した。それは国際政治に新たな状況が生じたからである。すなわち
アメリカの大統領にローズヴェルトが就任し、ドイツではヒトラーが権力を
掌握した。

わが国では兵器廠襲撃事件以後、チッタゴンのヒンドゥー住民に対して警
察が苛烈な弾圧を加えた。1931年10月にホリボト・ボッタチャッジョ
が、警察幹部のカンバハドゥル・アフサヌッラハを射殺した。ホリボトはた
だちに捕らえられた。ところがその際ひどい暴行を受け、警察署に連行され
る前に死亡してしまった。これがきっかけでヒンドゥーとムスリムの間に暴
動が発生した。

私はボリシャルにいる間にガンディー、デーシュプリヨ・ジョティンド
ロ・モホン・シェングプト(註146)、それに雑誌「ザ・ムサルマーン」の編集
長のムジボル・ロフマンの演説を聞く機会に恵まれた。ガンディーのヒン

ディー語の演説は感心しなかった。シェングプトは厄難を救う美男のアシュヴィン双神さながら、学生たちにこう説いた。「起きよ、目覚めよ、立て若者よ。母なるインドが呼んでいる。」これには感激した。ムジボル・ロフマンもまたアシュヴィン双神となって「合同選挙」について説いた。彼は真の愛国者であり社会奉仕家だった。自分が不正義だと思う事柄について異議を唱えるのを決して恐れなかった。当時も彼には政府の側から執拗に誘惑が持ち出されたが、ついに道を踏みはずさせることはできなかった。

ポリシャルのプロジモホン・カレッジの教授たちは、モウルヴィーを唯一の例外として学長以下皆ヒンドゥーだった。だが教授たちは教えることに専念していた。近頃よく見られる出世競争や派閥の形成、あるいは術策をめぐらしたり、お互いを中傷するようなことはなかった。そのため彼らは若者や娘たちの尊敬を集めた。学問を論じ授けることこそが彼らの生き甲斐だった。先生たちは、おしゃれには関心がなかった。英語のシュレン先生などは時々、腰布とスカーフの上にどういうつもりか蚊帳をまとうていた。

ポリシャルのカレッジ時代に読んだイサドラ・ダンカン(註147)の「自伝」やエリヒ・レマルク(註148)の「西部戦線異状なし」は、今でも印象に残っている。ワイズミュラーのターザン物映画「類猿人ターザン」(註149)も好きだったし、ノーマ・シアラーやメイ・ウェスト、クララ・ボウなどの演技も気に入っていた。その頃ポリシャルにベンガル語のトーキーが掛かった。シャラトチャンドラ(註150)原作の「十六才」である。これに比すべき東ベンガルの作品は「顔と仮面」だろう。だが無声映画でもオヒンドロ・チョウドゥリ、ドゥルガダシュ・ビヤナルジ、シタ・デビを初め多くの俳優の作品を私たちは楽しんでいた。

インターミディエイト(中間試験)(註151)が終わって結果が発表されると、私は大学へ入るために再びダッカへ戻った。

注

(1) ヒジュラ暦969年(西暦1562年)にアクバル帝が太陰暦を廃して太陽暦を採用したのを起源とするベンガル地方の暦。西暦から593年ないし594年を引くと年数が得られる。

(2) ベンガル暦5月。陽暦の8、9月頃に当たる。

(3) ルーブル美術館の「モナリザ」は1911年8月21日の白昼、イタリア人の塗装工によって持ち出され、行方不明となった。一時回収は絶望視されたが、約2年後にフィレンツェで犯人が売りに出し、1913年12月21日、イタリア政府からフランス政府に引き渡された。

(4) 1905年に施行されたベンガル分割令のこと。イギリスによるインド確保の強化策として、ベンガル州はベンガル本州(西部ベンガル、ビハール、オリッサ)と東ベンガル・アッサム州とに分割された。しかし広範な反対運動にあい、1911年に撤回された。

(5) カルカッタからデリーへの遷都は、1911年11月訪印中のジョー

ジ5世により、ベンガル分割令の撤回とともに発表された。

(6) Rabindranath Tagore (ロビンドロナト・タクル、1861～1941) インドの文豪・思想家。1913年ノーベル文学賞を受賞。1916年、24年、29年の三度にわたり来日した。

(7) A.K.Fazlul Haq (1873～1962) ベンガル出身の大物政治家。1954年の東ベンガル州議会選挙では野党統一戦線を率いて勝利し、同州(東パキスタン)首相に就任した。

(8) 1937年初めのベンガル州議会選挙では、ファズルル・ハックの農民大衆党が進出し、その結果ハックを首班として、ムスリム連盟と指定カースト党の連立政権が発足した。不安定な連立政権は kongress の分裂工作を受けて揺らぎ、ハックは kongress を激しく非難した。(加賀谷寛、浜口恒夫「南アジア現代史Ⅱ」)

(9) Surendranath Banerjee (1848～1925) ベンガルの政治家。1885年のインディアン・ナショナル・kongress (インド国民会議派) の創設者の一人。

(10) 16世紀後半から17世紀初頭にかけて、ムガル朝の支配に抵抗したベンガルのヒンドゥー領主。1604年没。

(11) ジャイプルのラージプート(ヒンドゥー王族)。アクバル帝の重臣として政戦両面に活躍した。

(12) タールク (Ta'alluq)、アラビア語由来の語で、臣下に恩典として授与される「所領」を意味する。(京大東洋史辞典編纂会「新編東洋史」)

(13) タールクダール (Ta'alluqdār)、本来「タールク」の所有者の意であるが、ベンガルではザミーンダール(ṣ14)と同義、ないしはそれに従属するものを指した。(同上)

(14) ザミーンダール (Zamīndār)、もとペルシャ語で、「地主」の意。英領時代の徴税地主。オリッサ、ベンガル、マドラス、アッサムなどに置かれた。(同上)

(15) ベンガル暦6月。陽暦の9、10月頃にあたる。

(16) 小麦粉や米粉をギーで揚げて蜜をかけた渦巻状の菓子。ヒンディー語の「ジャレービー(Jalebī)」にあたる。

(17) Mullī、アラビア語で「主人」「味方」を意味する Mawlī がペルシャ語に転訛した語。本来はイスラームの諸学に通じた人に対する尊称だが、広くイスラームの宗教教育やマスジドでの説教、儀式の執行などに携わる人を指す。(平凡社「イスラム事典」)

(18) Mawlawī, 上記 Mawlī と同根の語。一般にイスラーム諸学やアラビア・ペルシャ語に通じたイスラーム学者のこと。

(19) ターナー (Thānā)、警察区。数箇村よりなるポログナ(郡)の次区分。ただし現在のバングラデシュではエルシャド政権による改革で、タナは地方行政、農村開発の中核たるべく、ジラ(県)の次区分に格上げされている。

(20) チャイトラ・サンクラーンティ (Chaitra Sankrānti)、チョイトロ月 (ベンガル暦12月。陽暦の3、4月頃) の最後の日。大晦日。

(21) ヴァイシャーキー・メラー (Vaiśākhī Melī)、ベンガル暦の新年。ボイシャク月 (ベンガル暦1月。陽暦の4、5月頃。) の第一日。通常4月14、15日頃にあたる。

(22) ベンガル暦3月。陽暦の6、7月頃にあたる。

(23) ラタヤートラー (Rathayātrī)、「ロト (山車) のジャトラ (行進)」、アシャル月白半の2日に行われるヒンドゥーの祭り。ジャガンナート (「世界の主」の意でヴィシュヌ神=クリシュナのこと)、クリシュナの兄のバララーマ、妹のスバドラの像を山車に乗せて練り歩く。ジャガンナートとしてのクリシュナは特にベンガル地方で崇拝され、オリッサ州プリーのジャガンナート寺はその信仰の中心である。(菅沼晃「インド神話伝説辞典」)

(24) ドゥルガープージャー (Durgāpūjī) のこと。アッシン月 (注15) 白半の1日から10日にわたって行われるシヴァの神妃ドゥルガーの祭りで、特にベンガル地方で盛ん。月例祭の8日と、ドゥルガーが悪魔マヒシャを退治した記念日の10日が重視される。なお同じ時期にインド各地では、ラーマ王子の羅刹王ラーヴァナへの勝利を祝うダシャハラー祭が盛大に催される。

(同上)

(25) カールティカ・プージャー (Kīrtika Pūjī)、カルティク月 (ベンガル月7月。陽暦の10、11月頃) の満月の日に行われるヒンドゥーの祭り。カールティカ・プールニマー。

(26) バターサー (Batāsī) 菓子、砂糖菓子の一種。原義は「空気 (バタース) の入ったもの」

(27) Faridpur、ダッカの西方約60kmに位置する町。

(28) Dudu Miyan (1819~1862) 本名ムハンマド・ムフシヌッディン。19世紀中葉に東ベンガルで活躍したファラーイジー運動 (注29) の指導者。シャリーアトラーの息子。1840年代に運動の組織化を図り、自ら教団の長になった。「土地は神のものである」と説いて、地主による土地の独占は許されないと主張したため、ムスリム小作農民がこの運動に加わり、農民による地主襲撃が起こった。彼の死後、運動は衰えたが、東ベンガルではその後も長く農民運動の一つとして、この運動を継承する小グループが残存していた。(平凡社、前掲書)

(29) Farī'izī、19世紀初め東ベンガルでシャリーアトラーが創始したムスリムの社会改革運動。彼は二度のメッカ巡礼を行い、出身地のフォリダブルを中心にムスリム農民の間を説教して回り、ムスリムとしての宗教的義務 (ファラーイズ) を厳しく守ることを訴え、運動参加者にはムスリムの生活に取り入れられたヒンドゥー教の慣習・儀式を捨てるように誓わせた。

(同上)

(30) 1895年の祖父の死の時、父が18才だったとすると (p. 4)、この辺り年令が合わない。

- (31) 強風に吹き消されないようにはやのついたオイル・ランプ。
- (32) イード・アルフィトル。(Īd-al-Fiṭr)ムスリムの断食明けの祭り。断食月のラマダーンに続くシャッワール月の1日から3日までイスラーム世界全土において盛大に祝われる。(平凡社、前掲書)
- (33) ムスリム男性の着る詰襟型の上着。
- (34) ペルシャ風のゆったりしたズボン。
- (35) イード・アルアドハー (Īd-al-Adḥā) 犠牲祭。巡礼月のズー・アルヒジャ月の10日から13日にかけて4日間続く。メッカ巡礼の最終日にあたる10日には巡礼者が動物犠牲を捧げるが、これに合わせて各家庭でもいっせいに犠牲を屠る。祭日期间中人々は晴れ着を着て外出し、相互に訪問しあったり祝いの言葉を交わして喜びあう。(同上)
- (36) Fātiḥ、死者を追悼するために墓地などでコーランの開扉の章(ファティハ)を朗誦すること。
- (37) Shabī Barīṭ、シャバーン月の15日の夜。徹夜で祈りが捧げられ、亡くなった祖先に対して供え物がされる。この夜、生きている者の来年の命と運命が天国で記録されるという。
- (38) ハルワー (Halwā) 菓子。小麦粉や豆粉をギー(精製バター)で炒め、砂糖やミルクを加えて煮た菓子。
- (39) バルフィー (Barfī) 菓子。牛乳を煮つめて作る菓子。雪(Barf)のように白いことからついた名前。
- (40) オジュはアラビア語のウドゥー (Wudū小浄)に由来する語。礼拝などの前に清潔な水で両手、口中、鼻、顔、肘、頭、両足を所定の方法に従って浄めること。(黒田壽郎、「イスラーム辞典」)
- (41) Milād、結婚、詩会、宗教行事など何事によらず集まって何かを祝う会。
- (42) Shantipur、カルカッタの北約80kmの町。
- (43) Jīndīnī、ダッカ名産の高級モスリン。
- (44) 英人ジョン・マーセル(1791~1866)によって発明された苛性アルカリ処理法(マーセル法)を施して、光沢を与えた木綿地。
- (45) 注(24)参照。
- (46) ヴィジャヤダシャミー (Vijayādaśamī)、アッシン月(注15)白半の10日に祝われるヒンドゥーの祭礼。この日はラーマ王子が羅刹王ラーヴァナを破った日とされ、ラーヴァナと羅刹たちの人形が熱狂の中に燃やされる。次項参照。
- (47) ダシャハラー (Daśaharī)、ラーマのラーヴァナへの勝利を記念する祭りで全国的に盛大に祝われる。アッシン月白半の1日から10日まで続き、毎夜ラーマ・リーラー(ラーマの生涯を劇にしたもの)が演じられる。最終日の10日が前項のヴィジャヤダシャミーである。注(23)参照。
- (48) ラクシュミー・プージャー (Lakṣmī Pūjā)、カルティク月(注25)の黒半の1日(満月)に行われるヒンドゥーの祭り。富と繁栄の女神ラ

クシュミーを祭る。この日はラーマ王子が14年の流浪を終えて都に帰還した日とされる。家々は無数の美しい色電球やローソク、ランプなどに彩られ、ディワリー（燈明）祭とも呼ばれる。（田中於菟弥「インドの神話」）

（49）Court Nazir, Nazir, 裁判所の書記官。令状の送達、宣誓証書の受領、法令違反や治安妨害の調査などの任に当たる。

（50）ベンガル暦9月。陽暦の12、1月頃にあたる。

（51）ベンガル暦10月。陽暦の1、2月頃にあたる。

（52）Adhīn、アザーン、ムスリムの礼拝の時刻を告げる肉声による呼びかけ。これを行う人をムアッジンといい、彼は人差し指を耳の穴に入れてメッカの方角に向かってアラビア語の文句を唱える。（平凡社、前掲書）

（53）イマーム（Imām）であること。ここでは正しい礼拝の方法を心得、集団礼拝の際、指導者としての役割を果たすこと。

（54）Pīr、イスラーム神秘主義における聖者。ピールはベルシャ語で、主として神秘主義教団（タリーカ）の弟子（ムリード）たちを指導する道師の意味で用いられる。（平凡社、前掲書）

（55）Zarda、サフランで黄色く（Zard）色を付けた甘味のあるナッツ入りのピラフ。

（56）水に漸した米を蒸してから、平らに搗いた食物。ヒンディー語のCiṛwī, Ciurīにあたる語。

（57）Ḥakīm、ギリシャ医学の流れを汲む医師。

（58）母との不和が原因で、父は家を離れていたものか？

（59）Badiya、ジブシーのような人たち。Badiyaとも。BedeはBadiyaの転訛した形。低カースト・ヒンドゥーを主体とする水上生活者。

（60）Murshidabadの歌。Murshidabadはカルカッタの北約170kmの町。

（61）イギリスの詩人ウィリアム・ワーズワースの詩「水仙」の一節。

（62）ムガル朝期に、ベンガル地方との内陸交易に従事したアルメニヤ人やギリシャ人の建設した、旧市街にある街区。現在同地区には、1781年建立の聖復活アルメニヤ教会（Armenian Church of the Holy Resurrection）が残っている。

（63）Nawāb、もとムガル朝によって封じられたムスリムの大守。

（64）ノアカリ、バコルゴンジ、ボリシャル等の地方で収穫され、バラムと呼ばれる船で運ばれる米。

（65）Pālkī Gāṛī、バルキ（駕籠、Palanquin）型をした屋根付きの馬車。

（66）Pardā、パルダーの制。女性を他家の男性の目に触れないように隔離する習慣。

（67）Muhammad Ayub Khan（1907～74）、パキスタンの大統領（1958～69）。もと陸軍総司令官で、58年10月、無血クーデターによって政権の座に就いた。

（68）アユーブ政権期の東ベンガル州（東パキスタン）知事。

（69）Lalbagh Fort、ダッカの旧市街に残る未完の城砦。1678年、ア

ウラングゼーブ帝の第三王子ムハンマド・アーザムの命を受けて着工されたが、彼の娘のパリー・ビービーの死によって中断されたままとなった。

(70) Waqf「停止」を意味するアラビア語で、イスラーム法の用語として所有権移転の永久停止を意味する。一般に政府または個人がモスク、マドラサ、病院、孤児院などに、その維持のため土地を寄進する慈善ワクフと、個人が子孫のために信託する家族ワクフとがある。本来ワクフはアッラーの財産、もしくはアッラーの下僕たちの公的共有財だったが、後にはその原則が崩れて富者に利用されるようになった。(平凡社、前掲書。黒田、前掲書)

(71) Ram Mohan Roy (1772~1832)、ベンガルの社会・宗教改革家。1928年カルカッタにブラフマ・サマージを創設し、サティー(寡婦殉死)への批判を初めとするヒンドゥーの社会・宗教改革に取り組んだ。インド古典、イスラーム、キリスト教思想等に深い知識を有していた。

(72) Khwaja Nazimuddin (1894~1964) ダッカのナワーブ家出身のムスリム連盟の政治家。パキスタン建国後、東ベンガル州首相、パキスタン総督(1948~51)、中央政府首相(1951~53)等を歴任。

(73) Khwaja Shahabuddin 上記Nazimuddinの弟。やはりムスリム連盟の政治家で「ベンガルのマキャヴェリ」の異名をとった。1960年代にアユーブ・カーン軍政下で情報相を務めた。

(74) Ahsan Manzil、ダッカの旧市街を流れるブリゴンガ川沿いにあるナワーブ家の御殿。1872年に建てられた。

(75) Narayanganj、ダッカの南東24kmにある町。かつて交易と産業の中心地として栄えた。

(76) パンチャーヤト(Pañcāyat)。インド村落において古代より継承された自治組織。村やカーストの取り決めを行ったり、揉め事を調停したりする。五人委員会。

(77) Salimullah Khan (1884~1915)、ダッカの大地主。1906年の全インド・ムスリム連盟の創立に大きな役割を果たした。

(78) Knight Grand Commander of the Star of India

(79) Knight Grand Cross of the Order of the Indian Empire

(80) バンキム・チャンドラ・チャタルジー(注86)作の「ヴァンデー・マータラム」の一節。この詩は民族運動の昂揚の中で、外国支配に対して母なる祖国を解放しようとするインド人の心情を示すものとして、街頭や集会の場で歌われた。現在はインド共和国の第二国歌。(伊藤秀一「アジアの民族運動」)

(81) 「マハーバーラタ」のクルクシェートラにおける激戦の一場面。パーンダヴァの第二王子ビーマは、カウラヴァの長子ドゥリヨーダナの太腿を棍棒で打ち砕いて殺した。(菅沼、前掲書)

(82) 女神の名。ヒマラヤのダウラギリ峰を指すという。

(83) 西ベンガル出身のインドの文筆家。

(84) Alberuni (al-Bīrūnī、973~1050頃)、イラン系の数学者、

星学者、歴史家。ガズニ朝のマフムードに従ってインドに入り、広く各地を旅行して「インド誌」を著した。（京大東洋史辞典編纂会、前掲書）

（85）Anuśīlan（鍊成）、ベンガル地方の過激派の秘密結社。バンキム・チャンドラ・チャタルジー（注86）の同名の小説に由来する名前。以下も過激派の秘密結社。（J. P. ヘイスコックス「インドの共産主義と民族主義」）

（86）Bankim Chandra Chatarji（1838～94）、バンキム・チャンドラ・チャトールパディヤイー。ベンガルの著名な小説家・随筆家、ヒンドゥー指導者。

（87）Ramesh Chandra Dutta（1848～1909）、ベンガルの小説家。上記バンキム・チャンドラの主催する新聞「バング・ダルシャン」を中心に集まった文学同人の一人。

（88）ジャンマ・アシュタミー（Janma Aṣṭamī）、バドロ月（注2）黒半の8日に行われるヒンドゥーの祭。ヴィシュヌ神の化身であるクリシュナの生誕を祝う。

（89）Muḥarram（ムハッラム）。シーア派第三代イマーム、フサインの殉教（ヒジュラ暦61年ムハッラム月の10日）を悼んで、毎年同月に行われる殉難祭。フサインの命日に当たる最終日の10日目（アーシューラー）に祭は最高潮に達し、行列が練り歩く。その際、フサインの棺の模型（タージヤ）やフサインの切断された手の模刻が担ぎ出され、また参列者が鎖で自分の体を打ったりする。（平凡社、前掲書）

（90）Ta'ziya（タージヤ）、前項参照。

（91）Dulḍul、ムハッラムの祭礼の8、9日目に引き出される飾り馬。ドゥルドゥルは、もともとアレキサンドリアの大守からムハンマドに贈られた雌ロバで、後にアリー（第四代カリフ。ムハンマドの女婿でフサインの父）に譲られた。後世誤って馬とされるようになった。

（92）Khawaja Habibullah、後に1937年ベンガルに成立したファズルル・ハック州政権（注8）の農工相。

（93）シュリーパンチャミー（Śrīpañcamī）、（注99）参照。

（94）Muhammad Ali（1878～1931）、アリーガル・カレッジ出身のムスリム連盟の指導者。

（95）Agha Khan III（1877～1957）、アーガー・カーン三世。ボンベイの大実業家でコージャー派ムスリムの長。ムスリム連盟の創立に貢献し、パキスタン建国後まで大きな政治的影響力を有していた。（加賀谷、浜口、前掲書）

（96）Saiyid Amir Ali（1849～1928）、オリッサ出身でイギリスに留学して法律を学んだベンガル近代派のムスリム指導者。

（97）1923年アーガー・カーンとアミール・アリーはトルコの首相イスマトに手紙を送り、スルタン制とカリフ制との分離が全世界のムスリムに重大な関心を引き起こしたことを告げた。しかし、この手紙はイスマトが入

手する前にイスタンブールの有力な新聞紙上で公開された。ケマル・アタテュルクはその新聞の主幹を「独立法廷」にかけるとともに、こうした外国からの口出しをトルコの内政に対する干渉であると抗議した。（永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛「中東現代史Ⅰ」）

（98）Abul Hashim、ベンガル出身のムスリム連盟の政治家。独立前のベンガル州連盟書記長として活躍。

（99）サラスヴァティー・プージャー（Sarasvatī Pūjā）、マーズ月（注51）白半の5日のヒンドゥーの祭礼。ヴァサンタ・パンチャミーまたはシュリーパンチャミーと呼ばれる春祭で、カラシ菜の黄色い花にちなんで明るい黄色の衣類を着、学問、音楽の女神サラスヴァティーを祭る。サラスヴァティーの精巧な土像が作られる。（田中、前掲書）

（100）Fath-i-Duwāzdahum、毎月12日に行われるムハンマドの生誕を祝う祭礼。

（101）Director of Public institution

（102）ムハンマド・アリー（注94）とショウカト・アリー（Shaukat Ali）兄弟。キラファト運動におけるムスリムの中心的指導者。

（103）Bipin Chandra Pal（1858～1932）、ベンガルの政治家。パンジャブのラーラー・ラージバト・ラーイ、マハーラーシュトラのパール・ガンガーダル・ティラクとともにラール・パール・パールと称され、19世紀末から20世紀の初めにかけて民族主義運動に大きな役割を果たした。

（104）（注25）参照

（105）Chitta Ranjan Das（1870～1925）、ベンガル出身の会議派指導者。1922年のガンディーによる第一次非暴力抵抗運動の停止後、ガンディーの戦術に反発し、会議派内にスワラージ党を結成した。

（106）後にメーラト訴訟事件（注134）の被告の一人。

（107）Manabendra Nath Roy（1893～1954）、ベンガル出身の高名な革命家。コミンテルンの理論家として活動するが、29年に追放され30年に帰国。晩年はマルクス主義から離れた。民族・植民地問題についてのレーニンとの論争は有名。（J. P. ヘイスコックス、前掲書）なおカムルッディン・アフモドとローイの会見の様子は本書（「ベンガル中産階級の自己形成、Ⅰ」）の第4章に詳しい記述がある。

（108）ムハンマド・ファルフシヤル。ムガル朝第9代皇帝（位1713～19）。

（109）Vivekananda（1863～1902）、近代インドの改革思想家、宗教的实践者。ラーマクリシュナの門弟で、師の死後、教団を設立してその教説を全インドに広めた。すべての宗教はその根源が一つで最高神に発するゆえ、インド人は階級や宗旨の違いを捨てて人道主義に帰り、民族の精神を尊重せねばならないことを主張した。（京大東洋史辞典編纂会、前掲書）

（110）Valentine Chirol、英「タイムズ」誌の記者。20世紀初頭の民族運動の批判者として有名。

- (111) Jagdish Chandra Bose (1858～1937)、著名な科学者。
- (112) Barisal、ダッカの南方約130kmの町。ダッカとは水路で結ばれている。
- (113) ダッカの旧市街を流れるブリゴンガ川沿いの通り。ショドル・ガートと呼ばれる船着き場があり、一帯は賑わっている。
- (114) Nazrul Islam (1899～1976)、ベンガルの詩人。民族運動の高まりを前に激しい調子の詩を書き、「反逆詩人」と称せられる。(田中於菟弥、坂田貞二「インドの文学」)
- (115) カーリー (Qārī)、イスラームの学者・宗教指導者層であるウラマーの一員。美声であるとともにコーラン読誦の流儀を心得ており、各種の集会や儀礼で重要な役割を果たす。なお、クッラーはその複数形。ムクリーともいう。(平凡社、前掲書)
- (116) ムハッディス (Muḥaddith)、同じくウラマーの一員。広くは伝承一般、狭くはムハンマドの言行に関する伝承をハディースという。ムハッディスはその伝承者。(同上)
- (117) ジクル (Dhikr)。「アッラー・アクバル(神は偉大なり)」「アルハミド・イッラー(神に栄光あれ)」などのコーランの唱句を口にして、アッラーを賛美し称えること。特にイスラーム神秘主義では、このような称名を集団で一定の所作を伴いながらくり返し行うことによって、ファナー(消滅)と呼ばれる神との合一の境地に達しようとする。(同上)
- (118) 暑気や危険から頭を保護するための兜の形をしたひさしのついた布張りの帽子。
- (119) (注113) 参照。
- (120) 武器をもって非合法の集会に参加することを禁じ、罰する条項。
- (121) Patuakhali、ポリシャル(注112)の南方約40kmの町。
- (122) Baredhaman、カルカッタの北西約90kmの町。
- (123) Commissioner、数県(ジラ)よりなる行政単位であるCommissioneryの長官。
- (124) バドマ川。ガンガー川のバングラデシュでの呼び名。
- (125) 学名Clupea alosa、うなぎに似た美味な魚。
- (126) 既出(P.5)
- (127) Sarojini Naidu (1879～1949)、ガーンディーとともに活動した会議派の女性指導者。
- (128) 既出(P.3)
- (129) Grand Cross of the Bath
- (130) 1919年成立のインド統治法の改正問題。1920年代末から30年代半ばまでのインド政治は、この問題を一つの大きな軸として展開し、35年の新しいインド統治法の公布を見るにいたった。
- (131) Fourteen Points、全政党協議会の「ネヘルー報告」(注133)に対してジンナーが協議会に提示した要求。「分離選挙は当分の間存続させ

る」等、ムスリムのコミューナルな要求が含まれていた。

(132) Frederick Edwin Smith Birkenhead (1872～1930)、英本国のインド担当相。

(133) Nehru Report、1927年保守党のインド担当相バーケンヘッドのインド総督への働きかけによって、インド統治法の再検討を目的とするサイモン委員会が任命された。イギリス人ばかりの委員会を任命するに際してバーケンヘッドは、皆が揃って賛成するような憲法を自分で作ってみるがよいと述べて、インド人指導者たちの怒りを買った。この挑戦的な発言に対して、翌28年2月より会議派、ムスリム連盟、国民自由連合など各派の代表が一堂に会して全政党協議会が開かれるようになり、8月には将来のインド憲政改革プランに関する報告書である「憲法起草委員会報告」が発表された。通常この報告は委員長モーティーラール・ネヘルーの名を冠して、「ネヘルー報告」と呼ばれる。(山本達郎「インド史」)

(134) 1929年3月、主要な共産主義者と労働組合運動家ら31名が、英領インドの統治権をイギリス国王から奪取する陰謀を企てた(反逆罪)として投獄された事件。翌31年1月から北インドの地方都市メーラットで裁判が行われたのでこの名がある。イギリスによる労働運動と共産主義の弾圧という狙いをもったこの裁判は、被告団の法廷陳述によって、インドにおける共産主義思想のまたとない宣伝の場となった。(中村平治「南アジア現代史I」、J. P. ヘイスコックス前掲書)

(135) Muzaffar Ahmad (1893～1975)、メーラット訴訟事件当時はベンガル労農党の指導者。後にインド共産党の幹部。(同上)

(136) Shripad Amrit Dange (1899～19?) メーラット訴訟事件当時はボンベイ紡績工場労働者組合の指導者。後にインド共産党の議長を務めるが、1964年の自主派共産党の創立には加わらず、ソ連派共産党を指導した。(同上) なお、没年は未確認。

(137) Amanullah Khan, 1892～1960 (位1919～29)。急速な近代化政策を推進して失敗。

(138) Baccha-i-Saqī, ?～1929 (位1929)、本名ハビーブラー。タージク族の出身で、バッチャ・イ・サカーウ(水運び人の子)は通称。アマーヌッラーへの反乱があいつぐ中で、1929年1月無防備になった首都カーブルを占領し、アフガニスタンの支配者になる。しかし同年10月、第三次アフガン戦争の英雄ナーディル・シャーによって討伐される。(永田、加賀谷、勝藤、前掲書)

(139) 現在のインド国旗の原型で、サフラン、白、緑の三色からなる。

(140) バングラデシュ随一のベンガル語日刊誌。

(141) Suryasen (1894～1934)、スールヤセーン。武装民衆を率いてチッタゴンの兵器廠を襲撃し、一週間近く市内を占拠。1933年12月に逮捕され、翌年1月絞首刑に処せられた。

(142) Muhammad Iqbal (1897～1938)、インド・ムスリムの代

表的な詩人、思想家。パンジャーブの出身でケンブリッジ、ミュンヘン両大学で学んだ。本文のムスリム国家樹立の提案は、1930年の連盟アラールハーバード大会における彼の議長報告のなかでなされた。

(143) Muhammad Shafi (1869~1932)、親英保守派のムスリム連盟政治家。第二回円卓会議では州自治とヒンドゥー・ムスリムの分離選挙制を主張して、会議派との妥協を排した。(加賀谷、浜口、前掲書)

(144) ジャハーン・アラー・シャー・ナワーズ、1920年代末から活躍したパンジャーブのムスリム連盟女性指導者。パキスタン制憲議会メンバー。

(145) マイソールとジャイプルの藩王国宰相を務めた人物。

(146) 1885~1933、会議派の指導者。1923年に結成されたベンガルのスワラジ党(注105)を指導。

(147) Isadora Duncan (1878~1927)、米国の女流舞蹈家。モダン・ダンスの先駆者。著書に「未来の舞蹈」「自伝」など。

(148) Erich Maria Remarque (1898~1970)、ドイツの小説家。「西部戦線異状なし」「凱旋門」など。

(149) 題名が原文で「エディポロ」とあるのは不明。ただしワイズミュラーのターザン物なら、筆者がボリシャルで過ごした年代から考えてシリーズ第一作(1932年)以外になさそうなので、それをあてた。

(150) Sharatchandra Chattopadhyay (1876~1938)、シャラトチャンドラ・チャトパディヤイ。ラヴィンドラナート・タゴールとはほぼ同時代に活躍したベンガルの小説家。「シュリーカーント」「グリハ・ダーハ」などの社会小説がある。

(151) 大学で入学試験と卒業試験の間にある試験。

(解題)

ここに訳出したのは、Kamaruddīn Ahmad: Banglār Madhyavittar Ātmavikāś I、II. (Dacca, 1975、76)のうち第一巻の初めの2章である。この本は50年代にパキスタンの労働者や政府の代表として、L. O. や国連安保理の舞台で活躍し、またその後大使としてインドや東南アジア諸国に赴任した著者のベンガル語による自伝で、そこに語られた豊かな見聞と幅広い交流は、現代史の生きた証言と呼ぶにふさわしい内容である。またこれが1971年バングラデシュ独立闘争のさ中、獄中で書き始められた点も注目に値する。訳出した二つの章は幼少から青年期に至るまでの部分で、1910年代から20年代にかけての村や都市の暮らし、宗教行事、学校生活などについて興味深い記述に富んでいる。それらは当時の東ベンガル社会の実像を知るための貴重な資料を提供していると言えるだろう。さらに第二章では、政治史上重要だと思われる人物の名前が次々に挙げられている。訳者の勉強不足からこれらの諸点について十分調べることができず、注などに不備な点も残っているが、ひとまずレポートとして提出することをお許し願いたい。

機会があれば加筆・訂正をするつもりである。

訳・注に際しては桑島昭先生のご教示を賜り、実に多くのことを学ばせて頂きました。ここに記して深く感謝の意を表します。

（訳・注、三木雄一郎）